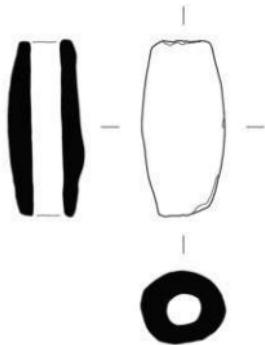


堀 遺 跡

(第80地点)

—市道渡里31号線（その2）狭い道路整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—



2020

水戸市教育委員会

堀 遺 跡

(第 80 地点)

—市道渡里 31 号線（その 2）狭あい道路整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020

水戸市教育委員会

ごあいさつ

堀遺跡は、那須茶臼岳を水源とする那珂川下流域右岸の台地上に立地する、弥生時代から近世に至るまでの土地利用が累積した集落遺跡です。周辺には古代常陸国那賀郡の寺院・官衙遺跡である国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」や、全長140mと県内第3位の規模を誇る古墳時代中期の前方後円墳である国指定史跡「愛宕山古墳」などが存在し、古くから政治・宗教・文化の中心地であったと考えられております。

歴史的文化遺産である文化財は、一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら、後世へと伝えていかなければならない貴重な財産です。しかし、近年の大規模開発等による都市化が進む中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつあります。そこで本市においては、文化財のもつ意義や重要性を踏まえつつ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところでございます。

この度、当該遺跡内におきまして狭い道路の整備工事が計画され、当初から遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねてまいりましたが、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至ったことから、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上で保護措置を講ずることといたしました。

この度の発掘調査により、奈良時代から平安時代にかけての堅穴建物跡6軒をはじめとする遺構が確認されるとともに、漁網に用いられたと推測される錐等が出土し、古代地域社会における生業活動の一端をうかがわせる資料が得られるなど、地域の歴史を解明していく上で貴重な成果を得ることができました。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大な御理解と御協力をいただきました地域住民の皆様、並びに関係機関の皆様方に心から感謝を申し上げます。

令和2年3月

水戸市教育委員会教育長　志田　晴美

例　　言

1 本書は、市道渡里31号線（その2）狭い道路整備工事に伴う埋遺跡（第80地点）の埋藏文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査は、水戸市より委託を受けた株式会社日本窯業史研究所が、水戸市教育委員会の指導のもとに実施した。

3 調査の概要は下記の通りである。

所 在 地 茨城県水戸市堀町450番2～10地先

調 査 面 積 61.5m²

調 査 期 間 令和2年1月27日 から 同年2月28日 まで

調査主体者 株式会社日本窯業史研究所（代表取締役 菅間裕二）

調査指導 廣松滉一（水戸市教育委員会事務局教育部歴史文化財課埋藏文化財センター
文化財主事）

調査担当者 水野順敏（株式会社日本窯業史研究所 日本考古学協会々員）

調査参加者 田村政子、寺門嘉津子、寺門節子、平根幸子

4 本書は、水野、廣松が分担して執筆し、廣松の指導のもとに、水野が編集した。遺物整理、編集は菅間智子の協力を得た。

5 出土遺物のうち古代の土器類は佐々木義則氏、近世遺物は河野一也・山下守昭両氏にご教示を賜った。理解不足や表現の誤りがあればすべて水野の責に帰す。

6 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、一括して水戸市埋藏文化財センターにて保管している。

7 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関・各位より御指導・御助力を賜った。御芳名を記して深く謝意を表する（敬称略・順不同）。

河野一也、鯉淵正彦、佐々木義則、八木岡昭治、山崎義信、山下守昭、茨城県教育庁総務企画部文化課、㈱アイズデザイン、東新建設㈱、西尾レントオール㈱、㈲広興北関東、㈱シンセイ警備、樋山真司土地家屋調査士事務所

凡　　例

1 本書に記している座標値は、世界測地系を用いている。挿図のうち、平面図の方位記号は座標北を、土層断面図の水準線高の数値は、海拔標高をそれぞれ示す（単位：m）。

2 土層及び遺物の色調は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 編・著 農林水産省農林水産技術会議事務局 監修 ㈱日本色彩研究所 色票監修 2008年版）に準拠する。

3 遺構平面図・土層断面図の縮尺は、1/30, 1/40, 1/60, 1/80とし、各図にスケールを明示した。

4 遺構図及び土層説明における略号等は以下の通りである。

S1：竪穴建物跡, SK：土坑, P：ピット, SD：構跡, SX：性格不明遺構, K：擾乱,

L：ローム, R：粒, B：塊, 動物歯牙：, 焼土・焼面：,

硬化面（層）：

5 遺物実測図の縮尺は、 $1/3$, $1/4$ を使用し、各図にスケールを明示した。遺物の計測数値は、cm及びgで示した。()内が推定値、[]内は現存値を示す。遺物実測図の断面墨ベタは須恵器を示す。

6 遺物番号は、遺構・遺物挿図、観察表、写真図版とも共通で、観察表の左端の番号で示してある。

目 次

ごあいさつ 例言 凡例 目次	
第1章 調査に至る経緯と調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
(1) 発掘調査の方法と経過	2
(2) 整理調査の方法と経過	2
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第1節 遺跡の地理的環境	3
第2節 遺跡の歴史的環境	4
第3節 堀遺跡における既往の調査	7
第3章 調査の成果	11
第1節 基本土層	11
第2節 検出された遺構と遺物	12
(1) 1区	12
(2) 2区	15
(3) 3区	17
(4) 4区	19
(5) 5区	21
(6) 6区	23
第4章 総括	29
第1節 土地利用の変遷	29
(1) 奈良・平安時代	29
(2) 中・近世	30
引用・参考文献	
写真図版	
報告書抄録・奥付	

挿 図 目 次

第1図 水戸市域周辺の地質と堀遺跡の位置 (吉岡ほか2001を加筆修正)	第12図 3区全体図
第2図 堀遺跡の位置と周辺の遺跡	第13図 3区第1号竪穴建物跡カマド, P 1, 出土遺物
第3図 堀遺跡における既往の調査地点	第14図 4区全体図, 第2号竪穴建物跡掘方
第4図 基本土層図	第15図 4区P 2 ~ P 4
第5図 調査区位置図	第16図 4区出土遺物
第6図 1 A区全体図	第17図 5区全体図, 第4号竪穴建物跡掘方, P 13
第7図 1 B区全体図	第18図 5区出土遺物
第8図 1 A区P 5 ~ P 9	第19図 6区全体図, 第6号竪穴建物跡掘方
第9図 2区全体図	第20図 6区出土遺物
第10図 2区P 10, 第2号溝跡・P 12土層	
第11図 2区第1号性格不明遺構・出土遺物	

表 目 次

第1表 堀遺跡の周辺遺跡	第3表 出土遺物観察表
第2表 堀遺跡 既往の調査一覧	第4表 出土遺物一覧表

写真図版目次

- 写真図版 1 A, 1A・1B区全景（南東から） B, 1A区全景（北西から） C, 1B区全景（南東から） D, 1A区P5完掘状況（南東から） E, 1A区P5土層断面（南東から） F, 1A区P6完掘状況（南東から） G, 1A区P7完掘状況（南東から）
- 写真図版 2 A, 1B区第1号土坑完掘状況（南東から） B, 1B区第1号土坑土層断面（南から） C, 2区全景（北西から） D, 2区第2号溝跡土層断面C・C'（南東から） E, 2区第2号溝跡土層断面B・B'（北西から） F, 2区P10完掘状況（北西から） G, 2区P11完掘状況（北西から）
- 写真図版 3 A, 2区第1号性格不明遺構動物歯牙下層出土状況（上から） B, 2区第1号性格不明遺構完掘状況（北東から） C, 2区第1号性格不明遺構動物歯牙上層近景（南東から） D, 2区第1号性格不明遺構動物歯牙下層近景（南東から） E, 3区全景（北西から） F, 3区P1完掘状況（南から） G, 3区第1号堅穴建物跡カマド完掘状況（南西から） H, 3区第1号堅穴建物跡カマド土層断面（南東から）
- 写真図版 4 A, 4区全景（南東から） B, 4区第2号堅穴建物跡完掘状況（北西から） C, 4区第2号堅穴建物跡掘方完掘状況（南東から） D, 4区第2号堅穴建物跡掘方土層断面（南東から） E, 4区第3号堅穴建物跡完掘状況（南東から） F, 4区第1・2号溝跡完掘状況（北西から） G, 4区南東面土層断面（北西から）
- 写真図版 5 A, 5区全景（南東から） B, 5区第4号堅穴建物跡完掘状況（南東から） C, 5区第4号堅穴建物跡掘方完掘状況（南東から） D, 5区第4号堅穴建物跡土層断面（北西から） E, 5区第4号堅穴建物跡掘方土層断面（南から） F, 5区第3号溝跡完掘状況（南から） G, 5区第3号溝跡土層断面（北から）
- 写真図版 6 A, 6区全景（南東から） B, 6区第5・6号堅穴建物跡完掘状況（北西から） C, 6区第5・6号堅穴建物跡掘方完掘状況（南東から） D, 6区第5・6号堅穴建物跡土層断面（南西から） E, 6区北西面土層断面（南東から） F, 6区第6号堅穴建物跡掘方土層断面（西から） G, 6区第6号堅穴建物跡遺物出土状況（南東から）
- 写真図版 7 A, 6区第4号溝跡・第2号土坑完掘状況（南東から） B, 6区第4号溝跡遺物出土状況（南東から） C, 6区第3・4号溝跡完掘状況（北西から） D, 6区第2号土坑遺物出土状況（北東から） E, 基本土層（5区南東面・北西から） F, 調査前状況（南東から） G, 調査前状況（北西から） H, 調査終了状況（北西から）
- 写真図版 8 2・3区出土遺物
- 写真図版 9 4・5区出土遺物
- 写真図版 10 6区出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査経過

第1節 調査に至る経緯

水戸市堀町及び渡里町地内に所在する市道渡里31号線（水戸市堀町450番2～10地先）について、狭い道路整備工事が計画されたことから、平成30年2月16日付け生整第557号で、水戸市長高橋 靖（建設部生活道路整備課扱）から水戸市教育委員会（以下「市教委」という）教育長あて、「埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて」の照会があった。市教委は平成30年3月30日付け教理第1696号で、対象路線は周知の埋蔵文化財包蔵地「堀遺跡（遺跡番号201-064）」に該当すること、及びこのことから、文化財保護法（昭和25年法律第214号。以下「法」という）第94条第1項に基づく通知が必要である旨回答した。

その後、令和元年7月16日付け生整第174号で、水戸市長から法第94条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が茨城県教育委員会（以下「県教委」という）教育長あて提出された。堀遺跡は、一部範囲が重複する「西原古墳群」や隣接する国指定史跡「台渡里官衙遺跡群」との関わりが想定されている、弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡である。当該路線のうち工事対象範囲以北において平成21年度に実施した本発掘調査（堀遺跡第18地点）、及び工事対象範囲南西隣地において平成29・30年度に実施した試掘調査（堀遺跡第69地点）では、周辺地域が奈良・平安時代の集落であったことを裏付けるように埋蔵文化財が濃密に存在することが確認されており、その分布は明らかに工事対象範囲まで広がることが想定された。当該工事計画の内容は「埋蔵文化財として扱う範囲及び開発事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いに関する基準（平成12年3月3日付け文第162号県教委教育長通知）」の別表原則Ⅲの「恒久的な工作物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人の関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が損壊したのに等しい状態となる場合」に該当することから、市教委は、当該工事着手前に本発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずる必要がある旨の意見書を付して、通知を県教委教育長あて、進達した。

県教委教育長からは、令和元年8月8日付け文第1438号で、遺構等が損壊されるなど埋蔵文化財の保存に影響があるので、工事着手前に本発掘調査を実施すること、及び調査の結果重要な遺構等が発見された場合は、その保存等について別途協議を要する旨、水戸市長あて指示・勧告があった。

これを受けて市教委は、工事対象範囲のうち、沿線に面する住宅出入口及び交差点等を除く約61m²を調査対象とし、株式会社日本窯業史研究所と発掘調査業務委託契約を締結のうえ、令和2年1月27日から令和2年2月28日の期間に本発掘調査を実施した。

（廣松）

第2節 調査の方法と経過

(1) 発掘調査の方法と経過

今次調査では、調査区を6区（1～6区）に区分した。各調査区は現在使用されている市道の両脇にある市道拡幅部分である。沿線住民の出入り口の確保の為、現道の両脇に並ぶ各2区（1・2区、3・4区、5・6区）を3回に分割して調査を行った。また、小・中学校の通学路となっている為、歩行者及び周辺住民、調査関係者の安全確保の観点から車両通行止めとし、歩行者・自転車のみの通行とした。調査に先立ち「道路使用許可申請」及び沿線住民や小・中学校、地元自治会への周知を行う。

1月27日、重機とダンプトラックで3・4区の表土を場外搬出し、同月30日より人力による調査に着手した。

3・4区は2月7日に埋め戻して現状復旧し、1区の表土除去に着手した。翌8日は2区の表土除去とともに、1区の調査に取りかかった。1・2区は2月17日より埋め戻しと現状復旧を行い、5区の表土除去を行った。翌18日は6区の表土除去と人力による調査を再開した。5・6区は同月28日に埋め戻しと現状復旧を行った。安全確保の後車両通行止めを解除した。同日借地部分の整地、器材の撤収を行い、発掘作業を終了した。

測量基準点は、市教委より提供を受けた基準点より調査区に移設した。座標値は日本測地系を世界測地系に変換したものである。

検出された遺構は確認順に種類毎に遺構番号を付与し、通し番とした。遺構の平面図はレイアウトナビゲーターで計測して入手で方眼紙に作図、土層図等は計測・作図とも人手で行った。縮尺はともに1／20を基本とし、カマド等の微細図は1／10で作成した。

写真撮影は、デジタルカメラを基本とし、記録画像形式はRAW・JPEG画像の2つのファイルで記録した。撮影に際しては三脚及び大型脚立を使用し、データを記した黒板を写し込んだ。

(2) 整理調査の方法と経過

遺構図面は、第2原図を作成して修正を行い、掲載遺構は縮尺1／40と1／60を基本とし、カマド等の微細図は1／20及び1／30で掲載した。出土遺物はすべて水洗いを行い、注記は可能な限り行った。注記は人手で行いニスを上塗りして剥落を防止した。掲載遺物の選別は市教委と協議の下を行い、実測・拓本・写真撮影は掲載遺物のみとした。

原稿執筆、挿図、写真図版を作成の後編集作業を行った。

出土遺物は掲載遺物と未掲載遺物に分別して収納し、台帳によって照合可能な状態となっている。また、写真・図面等の記録類も台帳によって検索が可能な状態に整理した。

整理調査は、令和2年3月15日まで実施した。

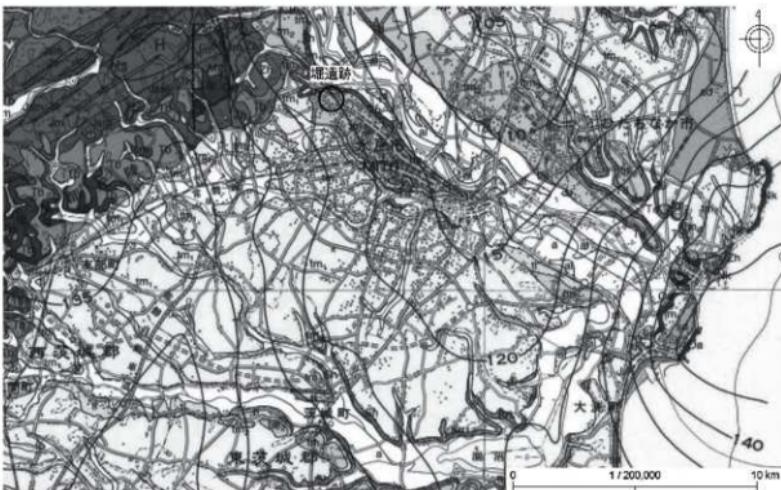
（水野）

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 遺跡の地理的環境

水戸市は関東平野の北東部に位置し、その市域は概ね、北西部の丘陵地帯、中央部並びに南部の洪積台地、及び北部並びに東部の沖積低地に区分される。丘陵地帯は、八溝山地南部の鶴足山塊南縁部に展開する友部丘陵の東部に当たる。ジュラ紀の堆積岩類のほか、後期白亜紀から前期古第三紀にかけての深成岩類（稲田花崗岩）や中期中新世の堆積岩類を基盤とし、友部層と呼ばれる中期更新世の海成堆積物が起伏を充填するように分布する。洪積台地は東茨城台地と呼ばれる広大な平地の北部に当たる。その大部分は見和層と呼ばれる最終間氷期の海成堆積物を基盤とするが、北縁部の、概ね桜川以北の部分は非海成の堆積物に薄く覆われており、その一帯は特に上市台地と呼ばれる。沖積低地は、那須山麓を水源として八溝山地を横断し太平洋へと注ぐ那珂川の下流部とその支流によって開析された低地で、那珂川や支流の淵沼川といった大規模な河川の両岸には自然堤防が点在している（吉岡ほか2001）。

堀遺跡は上市台地の北西端に立地し、東西約800m、南北約500mにわたって展開する。遺跡の標高は概ね30～35mである。遺跡の北方は那珂川が形成した沖積低地を開析する支流の田野川へと下る急峻な斜面となっており、田野川河床との比高は約25m、遺跡東方を南流する那珂川河床との比高は約30mを測る。（廣松）



第1図 水戸市域周辺の地質と堀遺跡の位置（吉岡ほか2001を加筆修正）

第2節 遺跡の歴史的環境

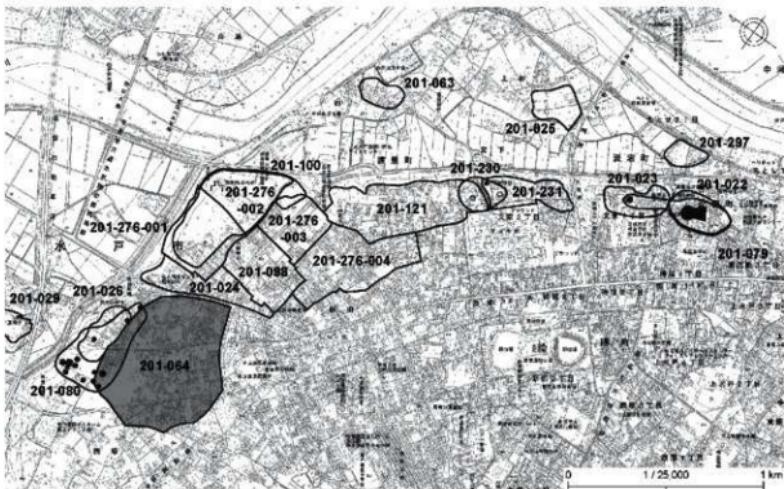
本節では紙数の都合上、堀遺跡が立地する東茨城台地の北縁部とその周辺に限って、主だった成果を概説する。

【旧石器時代】 堀遺跡の東方、同じ段丘面に立地するアラヤ遺跡から尖頭器、台渡里廃寺跡からナイフ形石器及び剥片、台渡里官衙遺跡から有柄尖頭器・周縁調整尖頭器が単独で出土している。しかし、北方に那珂川を望む台地の縁辺という立地から、付近に当該期の遺構が埋没している可能性は高いと考えられる。

【縄文時代】 アラヤ遺跡では、第1地点において7基の竪穴状遺構から早期の茅山下層式や後期の堀之内式を中心として、早期後葉から後期中葉にかけての縄文土器が出土した（井上編1990）。渡里町遺跡では、道路改良工事に伴いトレンチ状に調査が実施された第5地点において、当該期の土坑7基が検出され、これらのうち2基は早期前葉の燃系文系土器、2基（うち1基は袋状土坑）は早期後葉の条痕文系土器を伴う（佐々木ほか編2008）。同じくトレンチ状に調査が実施された第6地点では、中期の阿玉台式及び加曾利式を主体とする土坑71基及びピット110基が検出され、それらの平面分布が環状を呈することが想定された（高野ほか編2008）。

【弥生時代】 文京二丁目遺跡第6地点では、後期（十王台式期）の竪穴建物跡1軒が検出されている。平面形態は隅円方形で、中心部には地床炉を伴う。

【古墳時代】 台渡里廃寺跡では、平成6年に都市計画道路（3・6・30号線）建設に伴い実施された発掘調査において、7世紀第4四半期から8世紀第1四半期に帰属すると考えられる竪穴建物跡4軒が検出され、うち1軒は鬼高式期の所産とされている（井上編1995a）。



第2図 堀遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 堀遺跡の周辺遺跡

番号	遺跡名	種別	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良 平安	中世	近世
022	愛宕町遺跡	集落跡			○	○			
023	文京一丁目遺跡	集落跡		○	○	○	○		○
024	アラヤ遺跡	集落跡		○	○	○			
025	上杉遺跡	包蔵地				○	○		
026	西原遺跡	集落跡			○		○		
029	安土星遺跡	集落跡			○	○			
063	坏渡里遺跡	集落跡			○	○			
064	堀遺跡	集落跡			○	○			
079	愛宕山古墳群	古墳群				○			
080	西原古墳群	古墳群				○			
098	台渡里廻寺跡	寺院跡					○		
100	長者山城跡	城館跡						○	
121	渡里町遺跡	集落跡		○		○	○		
230	笠原神社古墳群	古墳群				○			
231	文京二丁目遺跡	集落跡			○	○	○		
276	台渡里官衙遺跡	官衙跡	○	○		○	○		○
297	ちとせ二丁目遺跡	包蔵地				○			

平成19年度に実施された台渡里第39次調査では、同時期の堅穴建物跡7軒、土坑2基、及び溝跡1条が検出された（佐々木・林編2008）。当該調査は下水道工事に伴う幅0.85mのトレンチ調査であったため、各遺構の規模は判然としないが、いずれの堅穴建物跡も、平成6年調査で検出されたものと主軸方向を同じくする。

集落の周辺に築造された古墳には、第一に、堀遺跡の北部に範囲が重複する西原古墳群がある。これまでの調査により確認されている前方後方墳1基、方墳2基、及び円墳23基の分布状況からは、古墳時代前期に古墳群北部の段丘崖直上に古墳が築造され始め、時期が下るにつれ墓域が南部へと広がっていったものと考えられる。なお、墳丘が現存するのは、前方後方墳1基及び円墳8基のみである。

上市台地中央部北縁には、前方後円墳2基及び円墳5基で構成される愛宕山古墳群が立地する。墳丘が現存するのは前方後円墳1基（愛宕山古墳）及び円墳1基（馬塚古墳）のみであり、前者は全長140m（前方部長61m、後円部径79m）、前方部幅約76m以上、前方部高約8.8m、後円部高10.7mと、茨城県内第3位の規模を持つ大型の前方後円墳（田中ほか2018）で、国指定史跡となっている。愛宕山古墳からは黒斑を持つ円筒埴輪片が多数採集されており（井・小宮山1999）、築造年代は5世紀前葉頃と考えられている（井・小宮山1999、栗原2018）。

【奈良・平安時代】 アラヤ遺跡では、第1地点において8世紀後半から10世紀初頭までの堅穴建物跡4軒、8世紀から9世紀に帰属すると考えられる工房跡1軒、9世紀に帰属すると考えられる掘立柱建物跡1棟が検出された（井上編1990）。また、第2地点の道路改良工事に伴う幅1.5～2mのトレンチ状の調査では、当該期の所産と考えられる溝跡3条、土坑2基、及びピット1基が検出された（佐々木ほか編2007）。このうち、1号溝は東西南向に軸を持つもので、覆土の上層及び中層から炭化米が出土した。断面形状は逆台形で、底幅は約1mと大型であり、正倉と軸を同じくすること等から、正倉院の区画溝であった可能性が指摘されている。また、6号溝も正倉の南北軸に平行するものであることから、関連が示唆される。2基の土坑は互いに類似した構造を持ち、一方には転礎や瓦片が多く

含まれていることから、那賀郡衙に関連する建物の柱穴であった可能性が高い。

台渡里廃寺跡の調査・研究は、高井悌三郎による戦前の学術調査を嚆矢とする（高井1964）。その成果を受けて昭和20年に長者山地区、観音堂山地区、及び南方地区的3地区が県指定史跡となった。長者山地区は、炭化米が出土すること、瓦倉が4棟確認されていることから（高井1964、瓦吹1991）、かねてから那賀郡衙正倉院と推定されていたが（瓦吹1991、黒澤1998・2000）、平成18年度に市教委が実施した範囲確認調査により、新たに9棟の礎石建物跡と北側区画溝が検出され、郡衙正倉院であることがほぼ確実となった。

観音堂山地区については、これまで那賀郡衙政府跡や河内駅家跡とする見解もあったが（瓦吹1991、外山1993）、平成14年から16年にかけて市教委が実施した範囲確認調査の結果、西側に講堂、その北東に金堂、さらに東側に塔が並び、金堂の北西に経蔵若しくは鐘楼と考えられる礎石建物が配置され、講堂の対極には中門が配置される東向きの独自の伽藍配置を持つとみられる、創建年代が7世紀後半に遡る寺跡であることが明らかとなった（川口ほか編2005、川口2006・2007）。出土遺物には平瓦や丸瓦の凹・凸面に「吉(士)田」、「川邊」、「阿波」、「中」、「志□」等台渡里廃寺の造営に関与した那賀郡内の郷名や「年足」のような個人名が籠書きされたもの、「川マ」、「禾」、「石上」銘の押印文字瓦、相輪の一部が籠書きされた瓦や「佛」という字の周りに絵が描かれた瓦、金箔製品、瓦製相輪の請花花弁と擦管等東国初期寺院でも初の例となった仏教関連遺物がある。

南方地区についてはこれまで寺院と考えられてきたが（高井1964、瓦吹1991、黒澤1998・2000）、平成14年から16年にかけて市教委が実施した範囲確認調査の結果、塔跡基壇の内部から内面黒色処理が施された土師器壊の破片が出土したことから、9世紀後半に入つてから造営された法隆寺式伽藍配置を意識した寺院であることが判明した。観音堂山地区的初期寺院が9世紀後半には火災で魔滅していることから、観音堂山地区的伽藍の焼亡後に、南方地区に再建しようとしたものと考えられる。また、瓦の出土量は建物規模に比して少ないと、区画溝の掘削が途中で魔滅していることから、造営を中止した可能性が高い（川口ほか編2005）。従って、確認されなかつた講堂は、本来存在しないものと考えられる。なお、これらの成果に基づき、平成17年に観音堂山地区と南方地区が国指定史跡に追加された。

台渡里官衙遺跡では、平成6年に都市計画道路敷設に伴い実施された発掘調査の第二調査区から8世紀中葉頃から9世紀第1四半期に帰属する堅穴建物跡4軒、8世紀前半から9世紀第1四半期に埋没したものと考えられる溝状遺構2条、建物跡2棟が検出された（井上編1995a）。なお、溝状遺構は他に7条検出されているが、それらの帰属時期は定かではない。平成17年に集合住宅建設に伴い実施された発掘調査では、8世紀前葉から9世紀中葉までの堅穴建物跡5軒、8世紀後葉の掘立柱建物跡3棟、8世紀末から9世紀前葉に造営された礎石建物跡1棟、及び溝状遺構1条が検出された（小川・大瀬編2006）。礎石建物跡は東西4.8m以上、南北7.3m以上の規模で、正倉であったと考えられている。溝状遺構は幅2.91m、深さ1.12m、底面幅0.86mの断面逆台形を呈するもので、9世紀前葉に構築され9世紀中葉から埋没し、10世紀末に再度掘り直され、11世紀前半にかけて埋没した区画溝であると考えられている。

渡里町遺跡第5地点では、7世紀後半から9世紀中葉に帰属すると考えられる堅穴建物

跡5軒、溝跡2条、及び土坑4基が検出された（佐々木ほか編2008）。このうち、8世紀後半に位置付けられる2号住居跡からは底部に「十」の字が墨書きされた須恵器高台付坪、9世紀前半から中葉に位置付けられる2号住居跡からは同じく底部に「十」の範書きが施された土師器坏が出土している。第8地点では、8世紀前葉から9世紀後葉に帰属すると考えられる堅穴建物跡8軒、土坑1基、及び掘立柱建物を構成するピット9基が検出された（源美・高野編2009）。当該調査では、台地北縁から南へ貫入する、幅40m前後、地表面からの深さ3m弱の浅い埋没谷が検出されており、谷の北西側では堅穴建物跡、南東側では掘立柱建物跡が主体的に分布する様相が看取された。第22地点では、7世紀後葉から10世紀前葉までの堅穴建物跡14軒、8世紀以前及び10世紀以降の掘立柱建物跡それぞれ1軒、ピット列1条、及びピット4基が検出された（米川ほか編2016）。本地点では、墨書き土器が土師器坏を中心に7点、範書き土器が須恵器坏を中心78点（いずれも破片数）出土しており、その多くが9世紀前葉の第10号住居跡及び10世紀前葉の第9号住居跡に含まれていた。これらの堅穴建物跡は円面硯や刀子といった遺物も包含しており、寺院や官衙との関連が示唆される。

【中・近世】 渡里町遺跡第8地点では、15世紀後半から16世紀前葉の所産と考えられる3基の地下式坑、及び中世の土師質土器皿細片を含む堅穴状遺構1基が検出されており、勝幢寺門前付近では近世の整地層が検出された（源美・高野編2009）。台渡里廃寺跡では、平成6年に都市計画道路（3・6・30号線）建設に伴い実施された発掘調査において、中世の井戸跡1基及び近世の土壙墓4基が検出された。井戸跡は開口部径約1.2m、深さ約3.85mの規模で、廃絶期は13世紀頃と考えられている。土壙墓の直径は概ね80～110cm程度であり、いずれも底面及び壁面に白色粘土が張り付けられた、いわゆる粘土貼り土坑である（井上編1995a）。また、南方地区の塔跡基壇の周囲からは幅0.3～1.5mの中世の溝状遺構が検出されており、基壇の南側には焼土、骨粉、「咸平元寶」等が含まれる火葬墓が営まれていた。基壇上及びその周辺からは中・近世の土器片や五輪塔の部材、板碑片等が出土していることから、中世から近世にかけて塔跡基壇が信仰の対象となり、周辺は墓域として利用されていたことが判明している（川口ほか編2005）。

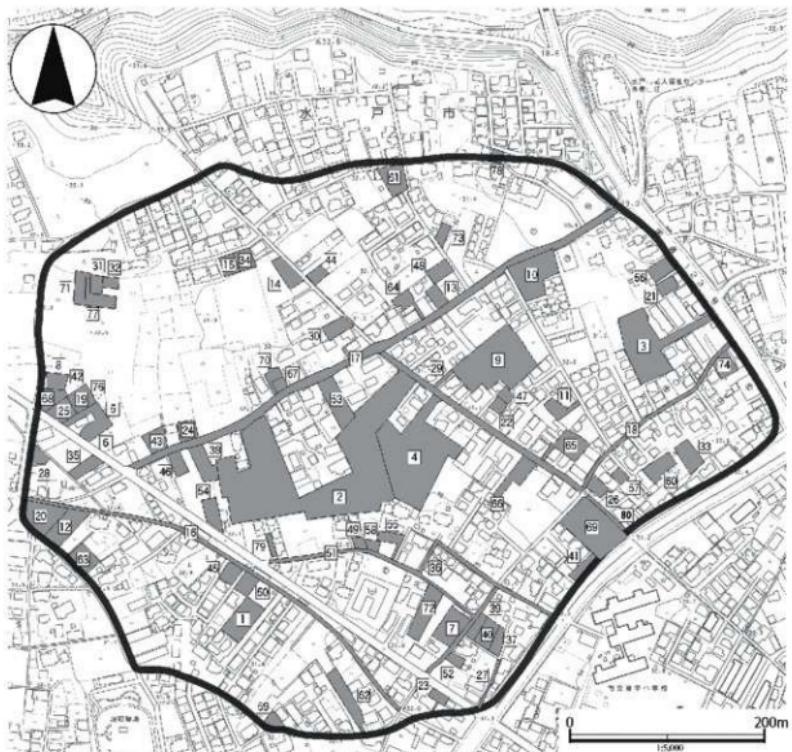
(廣松)

第3節 堀遺跡における既往の調査

堀遺跡における既往の調査については、『堀遺跡（第9地点区画No. 1～12）一造成地内における個人住宅建築に伴う平成19～21年度市内遺跡発掘調査報告書一』（川口編2020）で詳述しているため、そちらを参照願いたい。以下では主な地点に限って概観する。

第2地点では、弥生時代後期の十王台式土器（壺形土器）と古墳時代前期の五領式土器（壺、壇）を伴う堅穴建物跡1軒が検出された。当該構造は一辺約4.1mの隅丸方形で、角の対角線上には規則的に配列された4基の柱穴を伴う。遺構中央部には深いかく乱が入り、炉址は失われていた。堅穴の形態は、五領式期の性格が強いものと報告されている（井上編1995b）。

第3地点では第1・2次調査において、堅穴建物跡6軒、土坑8基、及びピット50基が検出された（川口・源美編2007、渡邊編2011）。堅穴建物跡は、8世紀前半から9世紀代に帰属するものと考えられる。また、いずれも3基のピットが一組となるピット列が見られる。



第3図 堀遺跡における既往の調査地点

第4地点では、8世紀後半から10世紀初頭にかけての堅穴建物跡5軒、掘立柱建物跡4棟、土坑9基、及びピット6基、並びに15世紀後半以前から近世後期にかけての塚1基、台地整形遺構1箇所、溝跡11条、掘立柱建物跡2棟、柵列1条、地下式坑8基、方形堅穴状遺構4基、井戸跡4基、土坑39基、及びピット30基が検出された（間宮・米川編2015）。

第9地点は宅地造成工事に伴い第1次調査が行われ、7世紀第4四半期の堅穴建物跡が2軒確認されている。8世紀代になると堅穴建物の軒数が7軒に増加するとともに、有段円形土坑や井戸など集落の構成要素が追加されるが、9世紀代になると堅穴建物跡は1軒に激減し、代わりに9棟の掘立柱建物群や3つの柵列が整然と並ぶようになる。さらに南東部では掘立柱建物群や柵列と主軸を同じくする官衙にみられるような断面逆台形の区画溝のコーナー部が検出されており、平安時代には官衙的な土地利用が展開していたことが明らかとなっている（小川・大庭編2008、川口編2020）。

(廣松)

第2表 堀遺跡 既往の調査一覧

地点	次数	調査箇所	調査開始日	種別	調査原因	遺構	遺物	備考
1		堀町828-2	平成5年11月16日	本 建壳住宅	○	○	伊藤1995	
2		堀町407-606ほか	平成6年9月2日	本 宅地造成	○	○	井上・千葉・桜村1995	
3	1	渡里町3237ほか	平成17年5月12日	試 宅地造成	○	○	水戸市教委2007(第11集)	
3	1	渡里町3237ほか	平成17年7月19日	確 宅地造成	○	○	水戸市教委2007(第11集)	
3	2	渡里町3231ほか	平成22年1月18日	本 宅地造成	○	○		
3	2 (第3地点の一部)	渡里町3231-17	平成25年6月19日	再試 個人住宅	—	—		
3	3231-12区画	渡里町3231-12	平成26年10月31日	試 個人住宅	○	○		
3	4-1 (区画No.4)	渡里町3231-13	平成23年10月18日	試 個人住宅	○	○		
3		渡里町3231-10	平成22年12月1日	試 個人住宅	○	○		
3		渡里町3231-11	平成24年11月6日	試 個人住宅	○	○		
3	3 (第3地点の一部)	渡里町3231-17	平成25年5月10日	試 個人住宅	—	○		
4	1	堀町428-1・3・4、431	平成13年6月1日	試 宅地分譲	○	○	トレンチ1本	
4	2	堀町426-8、426-9の一部	平成18年2月6日	試 宅地造成	○	○	水戸市教委2007(第11集)	
4	3	堀町428-1・3・4、431、433	平成26年10月14日	本 宅地造成	○	○	水戸市教委2015(第65集)	
4	区画No.10	堀町428-18	平成27年6月11日	試 個人住宅	○	○		
4	区画No.14	堀町428-22	平成27年10月9日	試 個人住宅	○	○		
4	区画No.15	堀町428-23	平成27年10月9日	試 個人住宅	○	○		
4	区画No.16	堀町428-24	平成27年10月9日	試 個人住宅	—	○		
4	区画No.6	堀町428-9・31	平成27年6月11日	試 個人住宅	—	—		
4	区画No.7	堀町428-15	平成27年6月11日	試 個人住宅	—	—		
4	区画No.8	堀町428-16	平成27年6月11日	試 個人住宅	○	—		
4	区画No.9	堀町428-17	平成27年6月11日	試 個人住宅	—	—		
4		堀町426-8、426-9の一部	平成17年5月31日	試 宅地分譲	—	○	トレンチ1本	
5		堀町381-2、382-2	平成18年5月6日	試 個人住宅	—	○	水戸市教委2009(第22集)	
6	1	堀町381-1、382-3	平成18年12月4日	試 個人住宅	—	○		
6	2	堀町381-1、382-4	平成19年3月12日	本 個人住宅	○	○		
7		堀町500-3・4	平成18年10月5日	試 宅地造成	—	—		
8		堀町295	平成21年3月23日	試 個人住宅	○	○		
9	1	渡里町3314ほか	平成19年2月26日	試 宅地造成	○	○		
9	2	渡里町3314ほか	平成19年7月23日	本 宅地造成	○	○	水戸市教委2008(第19集)	
9	9-1 (区画No.1)	渡里町3309-9	平成20年7月17日	試 個人住宅	○	○		
9	10-1 (区画No.10)	渡里町3314-5	平成21年7月13日	試 個人住宅	○	○		
9	10-2 (区画No.10)	渡里町3314-5	平成21年7月21日	本 個人住宅	○	○		
9	11-1 (区画No.11)	渡里町3314-4	平成21年8月24日	試 個人住宅	○	○		
9	12-1 (区画No.12)	渡里町3314-2	平成20年12月22日	試 個人住宅	—	○		
9	2-1 (区画No.2)	渡里町3309-10	平成21年2月24日	試 個人住宅	○	○		
9	3-1 (区画No.3)	渡里町3316-6、3317-1	平成20年4月9日	本 個人住宅	○	○		
9	4-1 (区画No.4)	渡里町3309-3	平成20年12月22日	試 個人住宅	—	○		
9	5-1 (区画No.5)	渡里町3309-8	平成20年10月21日	試 個人住宅	○	○		
9	6-1 (区画No.6)	渡里町3309-4	平成20年9月12日	試 個人住宅	○	○		
9	7-1 (区画No.7)	渡里町3309-7	平成20年4月14日	試 個人住宅	○	○		
9	7-2 (区画No.7)	渡里町3309-7	平成20年7月8日	本 個人住宅	○	○		
9	8-1 (区画No.8)	渡里町3309-2	平成20年3月4日	試 個人住宅	○	○		
9	9-1 (区画No.9)	渡里町3309-1	平成21年12月15日	試 個人住宅	○	○		
9	9-2 (区画No.9)	渡里町3309-1	平成22年1月19日	本 個人住宅	○	○		
10		渡里町3217-1・6	平成19年3月26日	試 個人住宅	○	○		
11		渡里町3294-1、3293-1	平成19年6月15日	試 個人住宅	○	○		
12		堀町396-1ほか	平成20年1月29日	試 宅地分譲	○	○		
13		渡里町3234-1の一部	平成20年4月9日	試 個人住宅	○	○		
14		堀町381-1、382-3	平成21年4月27日	試 個人住宅	○	○		
15		堀町327-1	平成20年7月11日	試 個人住宅	○	○		
15		堀町327-4	平成20年10月28日	立 個人住宅	—	—	浄化槽設置の立会	
16	1	堀町397先～529-3先	平成21年9月7日	本 公共下水	○	○		
16	2	堀町826-1先～838-2先	平成22年4月12日	本 公共下水	○	○		
17		渡里町3209-2先～堀町400-3先	平成21年11月2日	本 公共下水	○	○		
18		堀町424-5先～450-1先、渡里町3241-5先～3290-1先	平成21年10月6日	本 公共下水	○	○		
19		堀町293-1・8	平成21年10月23日	試 個人住宅	○	—		
20		堀町395-1	平成21年11月24日	試 集合住宅	—	○		
21		渡里町3328-7・10・11	平成21年12月15日	試 個人住宅	○	○		
22	1	渡里町3307-20	平成22年7月28日	試 個人住宅	○	○		
22	2	渡里町3307-20	平成22年9月9日	本 個人住宅	○	○		
23		堀町495-8	平成22年8月10日	試 個人住宅	—	—		
24		堀町307-2、307-3の一部	平成22年8月27日	試 個人住宅	○	○		
25		堀町293-7	平成22年9月15日	試 個人住宅	—	○		
26		渡里町3290-1	平成22年11月26日	試 個人住宅	—	—		
27		堀町490-1ほか	平成25年1月6日	本 公共下水	○	○		
28		堀町382-1、293-3	平成23年2月16日	試 共同住宅	—	—		

地点	次数	調査箇所	調査開始日	種別	調査原因	遺構	遺物	備考
30	1	昭町348	平成23年4月7日	試	個人住宅	○	○	
30	2	昭町348	平成23年9月6日	本	個人住宅	○	○	
31		昭町304- 5, 305- 6	平成23年9月15日	試	個人住宅	—	—	
32		昭町304- 2・3, 316- 2	平成23年9月15日	試	個人住宅	—	—	
33	1	渡里町3284- 8	平成23年10月18日	試	個人住宅	○	○	
33	2	渡里町3284- 8	平成23年12月16日	本	個人住宅	○	○	
34		昭町327- 3	平成24年1月13日	試	個人住宅	—	—	
35	1	昭町378- 1	平成24年1月13日	試	共同住宅	○	○	
35	2	昭町378- 1	平成24年4月2日	本	共同住宅	○	○	
36		昭町527- 1先～500- 1先, 昭町506- 2先～489- 2	平成24年2月13日	本	道路改良・公共下水	○	○	
37	1	昭町489- 1の一部, 290- 1の一部	平成24年3月2日	試	個人住宅	○	○	
37	2	昭町489- 1の一部, 490- 1の一部	平成24年5月15日	本	個人住宅	○	○	
38	1	昭町402- 1, 406- 1	平成24年8月21日	試	宅地造成	—	—	
38	2	昭町402- 1	平成25年2月5日	試	宅地造成	○	○	
38	3	昭町402- 4, 402- 5	平成25年5月9日	試	個人住宅	—	—	
39		昭町490- 5・6	平成24年8月22日	試	個人住宅	○	—	
40		昭町490- 7, 490- 8	平成25年2月5日	試	個人住宅	○	○	
41		昭町452- 1	平成25年2月7日	試	共同住宅	○	○	
42		昭町312- 2	平成25年4月19日	試	個人住宅	—	—	
43		昭町371- 1	平成25年5月29日	試	社宅	—	—	
44	1	渡里町3360- 4	平成25年6月19日	試	個人住宅	○	—	
44	2	渡里町3360- 4	平成29年11月22日	試	個人住宅	○	○	
45		昭町628- 1	平成25年8月6日	試	共同住宅	—	—	
46		昭町402- 6・7	平成25年10月10日	試	個人住宅	—	—	
47		渡里町3307- 19	平成25年10月17日	試	建物住宅	○	○	
48		昭町345- 2	平成26年1月10日	試	個人住宅	—	○	
49		昭町512- 1	平成26年1月10日	試	個人住宅	—	○	
50		昭町627- 9	平成26年3月12日	試	個人住宅	—	—	
51		昭町513- 3, 512- 4	平成26年3月12日	試	個人住宅	—	○	
52		昭町491- 3・4	平成26年7月10日	試	個人住宅	○	○	
53		昭町416- 1～7	平成26年8月26日	試	宅地造成	○	○	
54		昭町406- 2, 532- 1	平成26年9月19日	試	共同住宅	—	—	
55		昭町510の一部, 511- 1, 512- 1, 513- 1	平成26年12月16日	試	集合住宅	○	○	
56		渡里町3227- 5	平成27年5月1日	試	個人住宅	○	○	
57		渡里町3291- 3	平成27年6月11日	試	個人住宅	—	—	
58		昭町512- 3	平成27年7月2日	試	個人住宅	—	—	
59		昭町844- 1	平成27年8月19日	試	個人住宅	—	—	
60	1	渡里町3287- 2, 3291- 11	平成27年11月27日	試	土地固定	○	○	
60	2	渡里町3287- 2, 3291- 11各一部	平成28年3月3日	試	宅地造成	○	○	
61		渡里町3343- 1	平成28年1月20日	試	個人住宅	○	○	
62		昭町840- 1～3	平成28年11月2日	試	個人住宅	○	○	
63		昭町530番1の一部	平成29年2月1日	試	集合住宅	—	○	
64		渡里町3324- 2, 3353- 2・3	平成29年5月12日	試	個人住宅	○	○	
65		渡里町3296- 1	平成29年5月12日	試	個人住宅	—	—	
66	1	昭町443- 1, 438- 1	平成29年5月16日	試	共同住宅	○	○	
66	2	昭町443- 1, 438- 1	平成29年7月11日	試	共同住宅	—	○	
66	3	昭町443- 1, 438- 1	平成30年1月18日	試	共同住宅	—	○	
67		昭町356- 1・9	平成29年8月30日	試	個人住宅	—	○	
68		昭町294- 1・4	平成29年10月20日	試	個人住宅	—	○	
69	1	昭町450- 1・6, 450- 2・3・10の各一部	平成29年11月28日	試	宅地造成	○	○	
69	2(区画No. 7)	昭町450- 3・21・29	平成31年3月19日	試	個人住宅	○	○	
70		昭町356番5～7	平成30年5月22日	試	個人住宅	—	—	
71		昭町298- 2・304- 10	平成30年10月11日	試	個人住宅	—	○	
72		昭町503- 2	平成31年2月5日	試	アパート	○	○	
73		渡里町3336- 1の一部	平成31年4月12日	試	個人住宅	—	○	
74		渡里町3241- 8	令和元年5月24日	試	個人住宅	—	○	
75		昭町356- 3・4・8	令和元年6月6日	試	個人住宅	○	○	
76		昭町308- 1	令和元年7月17日	試	個人住宅	—	○	
77		昭町304- 1	令和元年7月17日	試	個人住宅	—	—	
78		渡里町3377番29	令和元年10月17日	試	個人住宅	—	○	造世遺構のみ
79		昭町526- 1地先	令和元年12月3日	立	公共下水	○	○	
80		昭町450番2～10地先	令和2年1月27日	本	公共下水	○	○	

第3章 調査の成果

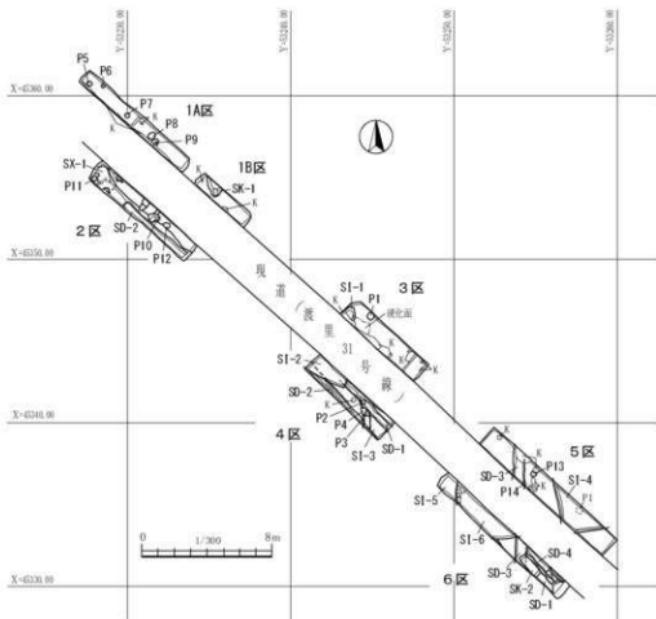
第1節 基本土層（第4図）

今次調査地点は、堀遺跡全体の南東端に位置する。周辺は一見するとほぼ平坦な地形に見えるが、調査地点の南に接して通る県道を観察すると南西より北東に向かって緩やかな傾斜地となっていることが判る。また、本遺跡の他の地点での調査成果からも、かつては比較的起伏に富む地形であったと考えられる。

調査区の中で最も南東に位置する5区南東壁の状況を第4図に示した。現地表面から約



第4図 基本土層図



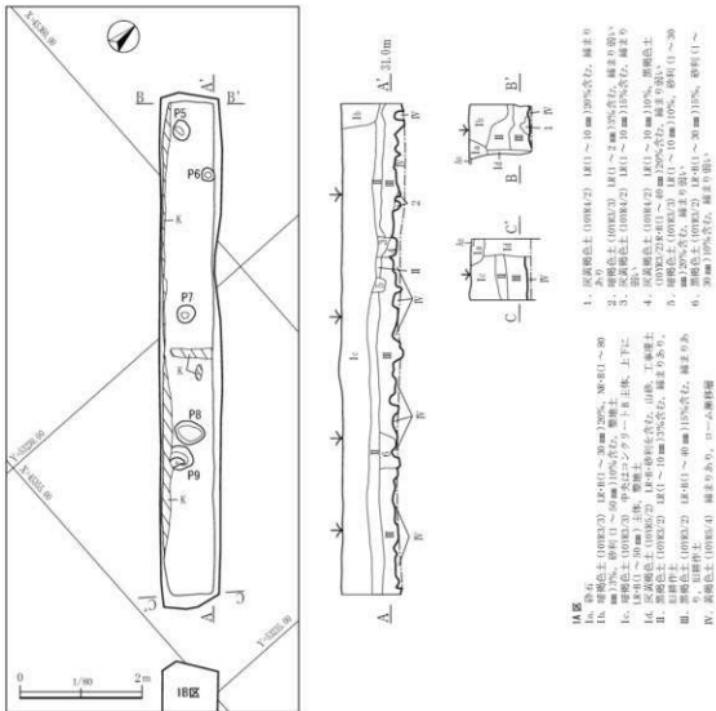
第5図 調査区位置図

70cm下のローム漸移層（第IV層）上面が遺構確認面であり、これより上（第I～III層）は工事に伴う整地及び新旧の耕作土である。なお、他の地点ではまれに七本桟・今市軽石層が確認されているが、それらは低（凹）地に堆積したものようである。（水野）

第2節 検出された遺構と遺物

（1）1区（第6～8図、第4表、写真図版1・2）

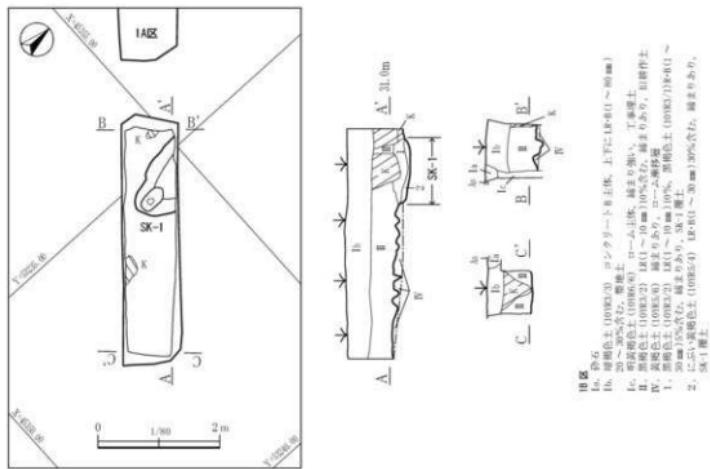
本調査区は幅約1m、長さ約13mを予定したが、途中水道管の横断が確認され、北西の1A区（幅1m、長さ8.5m）と南東の1B区（幅1m、長さ4m）に分割した。南北約2.7mに2区が所在する。1A区ではピット5基（P5～P9）、1B区では土坑1基（SK-1）が確認された。両区とも現地表面下約80cmのローム漸移層の上面が遺構確認面である。ピット5～9（P5～P9）は径約23～50cm、深さ約12～22cmで、覆土は1～2層に分層された。出土遺物もなく、底面に柱のアタリ痕の認められるものはなかった。



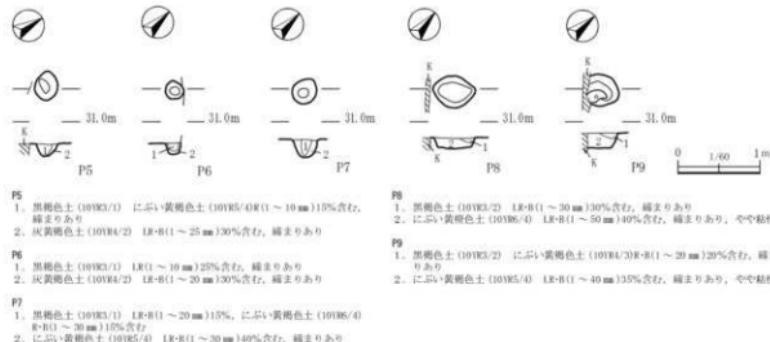
第6図 1A区全体図

帰属時期の特定は難しい。第1号土坑（SK-1）は南北部が調査区内に所在し、現存南北長約115cm、同最大幅約80cm、南北に長い梢円形と推定される。深さ約20cmで、壁はやや外傾し、底面は平坦であった。覆土は2層に分層され、上位は黒褐色土主体の自然埋没、下位はローム粒・塊を多く含み人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなく、帰属時期は不明である。

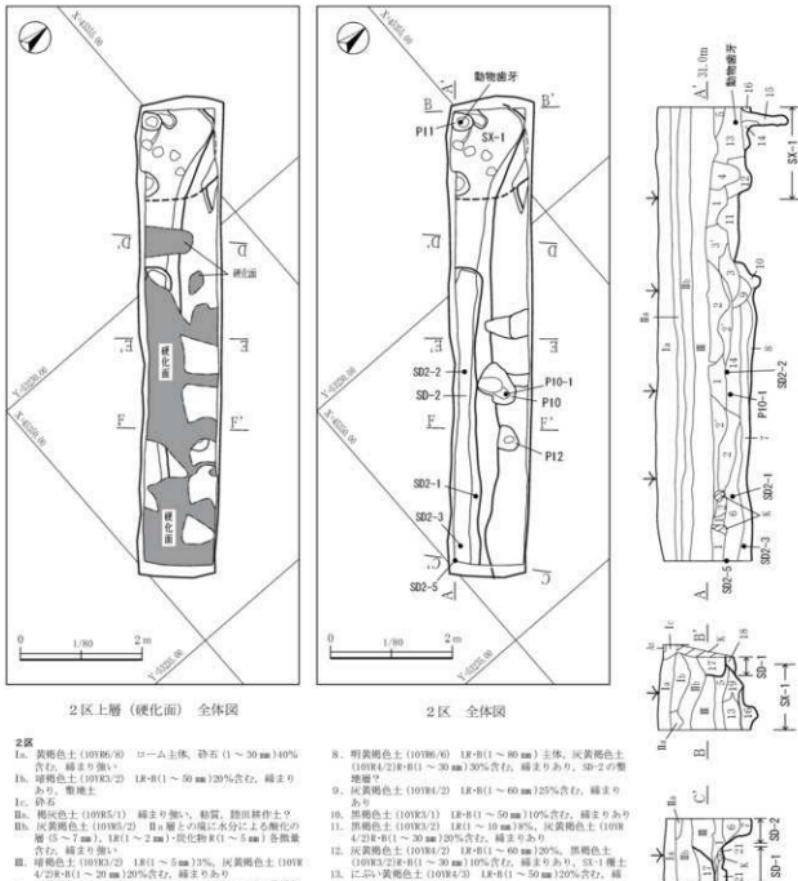
1A・1B区より出土の遺物は、1A区の表土中より出土の瓦片が1点である。



第7図 1B区全体図



第8図 1A区P5~P9



2区上層(硬化面) 全体図

2区 全体図

2区

- 1a. 黄褐色土 (10YR6/8) ローム主体、砂石 (1) ~ 30 mm 10% 含む。縞まり強い。
- 1b. 鈍鵠色土 (10YR2/2) LR-B (1 ~ 50 mm) 20%含む。縞まりあり。重地土。
- 1c. 鈍鵠色土 (10W5/5) 縞まり弱い。粗粒。隕石伴生土?
- 1d. 黄褐色土 (10YR5/2) LR-B (1 ~ 30 mm) 20%含む。縞まり非常に強い。
- 1e. 黄褐色土 (10YR5/2) LR-B (1 ~ 10 mm) 5%。にぶい黄褐色土 (10YR5/4) R-B (1 ~ 30 mm) 12%含む。縞まり非常に強い。
2. 黑褐色土 (10YR5/2) LR-B (1 ~ 30 mm) 12%含む。縞まりあり。
2. 黄褐色土 (10YR5/2) LR-B (1 ~ 40 mm) 12%含む。縞まり弱い。
3. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) LR-B (1 ~ 40 mm) 12%含む。縞まり弱い。
3. 黒褐色土 (10YR4/2) LR-B (1 ~ 40 mm) 12%含む。縞まり弱い。
4. 黑褐色土 (10YR5/2) LR-B (1 ~ 10 mm) 5%。灰黒褐色土 (10YR5/2) R-B (1 ~ 30 mm) 12%含む。縞まりあり。
5. にぶい黄褐色土 (10YR4/2) LR-B (1 ~ 30 mm) 12%。黒褐色土 (10YR5/2) R-B (1 ~ 30 mm) 15%含む。縞まりあり。
6. 黑褐色土 (10YR5/2) LR-B (1 ~ 30 mm) 15%。にぶい黄褐色土 (10YR5/2) R-B (1 ~ 30 mm) 10%含む。縞まり強い。SD-2 潜在層。
7. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) LR-B (1 ~ 20 mm) 12%。黒褐色土 (10YR5/1) R-B (1 ~ 80 mm) 12%含む。縞まり強い。SD-2 の潜在層。

8. 明黄色土 (10YR6/8) LR-B (1 ~ 80 mm) 主体。灰黃褐色土 (10YR4/2) R-B (1 ~ 30 mm) 30%含む。縞まりあり。SD-2 の潜在層。
9. 灰黃褐色土 (10YR6/2) LR-B (1 ~ 60 mm) 25%含む。縞まり。
10. 黑褐色土 (10YR5/2) LR-B (1 ~ 50 mm) 10%含む。縞まり。
11. 黑褐色土 (10YR5/2) LR-B (1 ~ 10 mm) 10%。灰黃褐色土 (10YR4/2) R-B (1 ~ 30 mm) 10%含む。縞まり。
12. 灰黃褐色土 (10YR4/2) LR-B (1 ~ 60 mm) 10%。黑褐色土 (10YR3/2) R-B (1 ~ 30 mm) 10%含む。縞まりあり。SL-1 潜土。
13. にぶい黄褐色土 (10YR4/2) LR-B (1 ~ 50 mm) 12%含む。縞まり。
14. にぶい黄褐色土 (10YR4/2) LR-B (1 ~ 20 mm) 12%。黒褐色土 (10YR5/1) R-B (1 ~ 10 mm) 10%含む。縞まり。
15. にぶい黄褐色土 (10YR6/4) LR-B (1 ~ 30 mm) 土体。灰黃褐色土 (10YR4/2) R-B (1 ~ 20 mm) 25%含む。縞まり。
16. 灰黃褐色土 (10YR5/3) LR-B (1 ~ 20 mm) 15%。黒褐色土 (10YR3/1) R-B (1 ~ 30 mm) 15%含む。縞まり。
17. 黑褐色土 (10YR5/2) LR-B (1 ~ 5 mm) 15%含む。縞まり弱い。
18. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) LR-B (1 ~ 20 mm) 20%含む。縞まり。
19. 灰黃褐色土 (10YR5/1) LR-B (1 ~ 10 mm) 5%。にぶい黄褐色土 (10YR5/4) R-B (1 ~ 30 mm) 15%含む。縞まりあり。SL-1 潜土。
20. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 縞まり強い。
21. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) LR-B (1 ~ 25 mm) 30%含む。縞まり。

第9図 2区全体図

(2) 2区 (第9~11図、第3・4表、写真図版2・3・8)

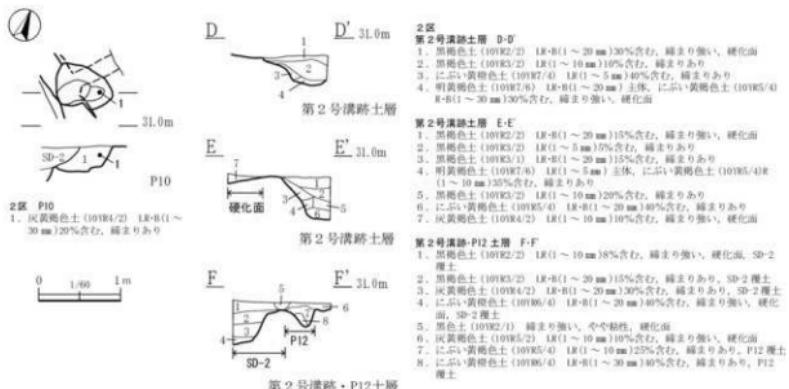
本調査区は幅約1.3m、長さ約8mである。北東約2.7mに1A・1B区が隣接する。現地表面下約90cmのローム漸移層の上面が遺構確認面である。

溝跡2条 (SD-1・2)、ピット3基 (P10~P12)、性格不明遺構1基 (SX-1)などが確認された。また、遺構確認面及び溝跡 (SD-2) の覆土中に路面状の硬化面 (層) が断続的ながら各所に認められ、当所が長期間にわたって道路として使用してきたものと考えられる。

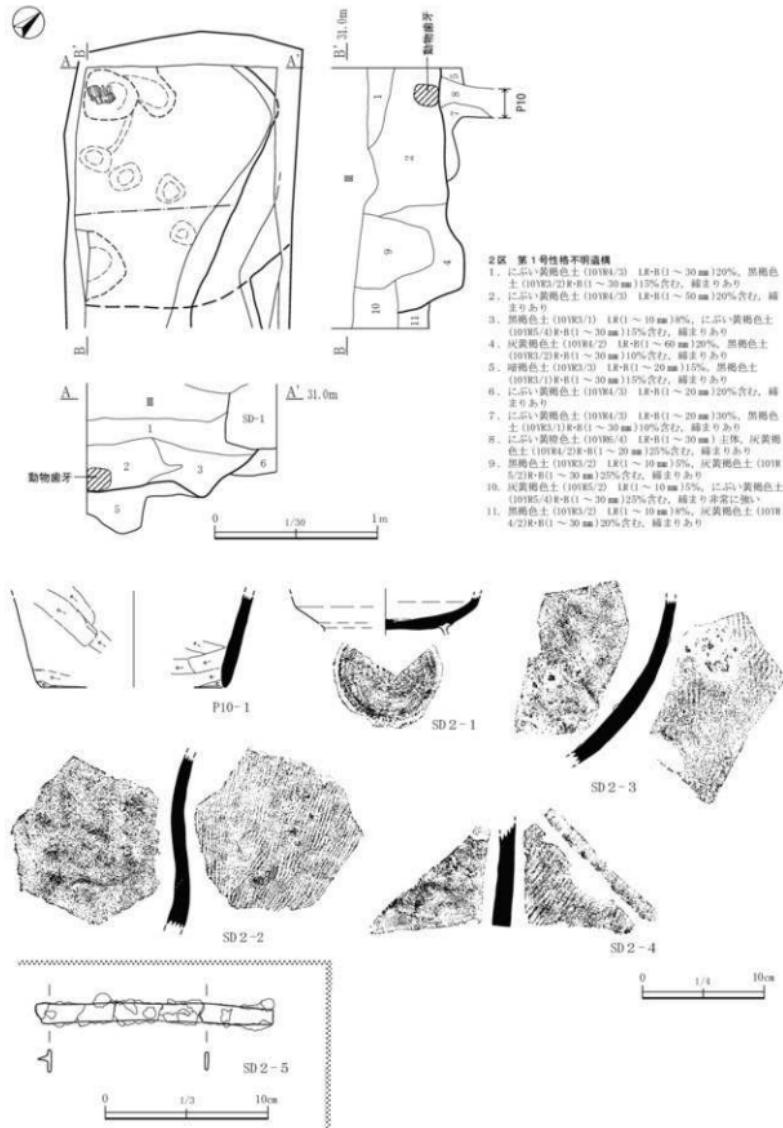
溝跡のうち第1号溝跡 (SD-1) は覆土の状況などから南東の4・6区第1号溝跡 (SD-1) に連なるものと考えられる。ここでは掘り込みが浅く、南東・北西端の土層断面に確認されたのみである。北東側が調査区外に延び全体を確認出来なかつたが、現存の上幅約60cm、底幅約40cm、深さ約40~45cmである。断面は逆台形もしくは逆U字形。覆土は黒褐色土主体の單一層で自然埋没と考えられ、締まりは弱い。遺物の出土はなかつたが、近世以降の所産と推察される。

第2号溝跡 (SD-2) は調査区南西側に所在し、やはり全体を確認することができなかつた。また、北西部は第1号性格不明遺構 (SX-1) との重複により判然としない。位置及び覆土の状態から南東の4区第2号溝跡 (SD-2) に連なると考えられる。現存の上幅約50cm、底幅約25cm、深さ45cm程度である。断面は逆台形状ではあるが、途中で段がつき、掘り直しが考えられる。覆土は7層に分層された。上・下層に著しく硬化した面 (層) が見られ、道路跡との関係が推察される。遺物は覆土中より土師器壊・甕など7点、須恵器蓋・壺・高台壺・壺・甕など21点の破片の他、不明鉄製品1点などが出土した。須恵器甕の破片には割れ口が非常に磨滅したものがあり、砥石に転用したと思われるものも見られた。

ピットは3基 (P10~P12) 確認した。ピット10・12 (P10・P12) は径約35~70cm、深さ約20~30cm程度前述の硬化面 (層) の直下で確認され、ピット10 (P10) の覆土中よ



第10図 2区 P10、第2号溝跡・P12土層



第11図 2区第1号性格不明造構・出土遺物

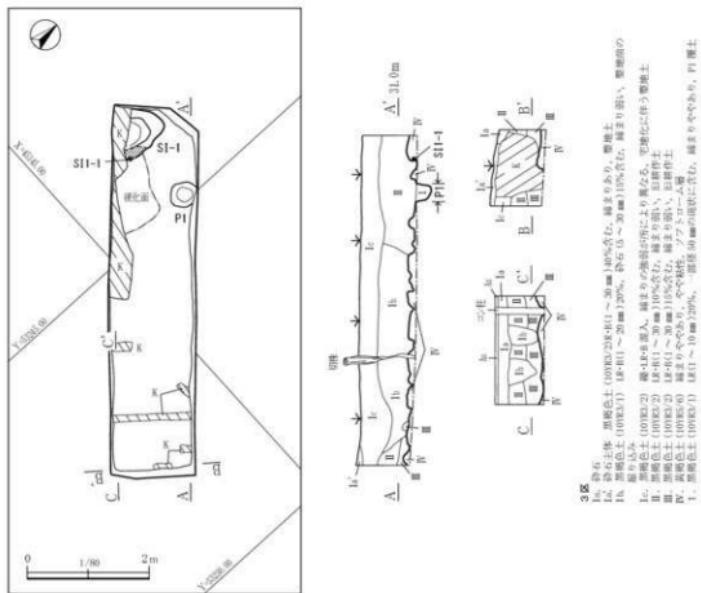
り須恵器壺の破片が1点出土した。ピット11（P11）は第1号性格不明遺構（SX-1）の下位に所在し、これに先行する遺構と考えられる。一边約30cmの隅丸方形で、深さは約75cm、覆土の状況から何らかの構造物の柱穴と思われるが、調査区が狭く判然としない。

第1号性格不明遺構（SX-1）は遺構の規模・形状は明確でないが、馬と考えられる動物の歯牙と骨の一部が出土した。第2号溝跡（SD-2）を切って掘り込まれたと考えられ、硬化面は失われていた。確認された痕跡と土層観察から、現存の北西・南東長約140cm、同北東・南西長約120cmで、深さ50cm程の掘り込みを推定した。しかし、硬化層（面）との切り合い関係を優先すると覆土は第11図の第4層を含まず第1～3層となり、現存の北西・南東長は約85cmと狭くなる。共伴遺物はなく、遺構の性格も単なる埋葬か祭祀的な埋納行為とも判断し難いが、近世以降という推定帰属時期を考慮し埋葬の可能性を考えたい。

(3) 3区（第12・13図、第3・4表、写真図版3・8）

本調査区は幅約1.3m、長さ約6mである。南西約2.7mに4区が隣接する。現地表面下約70～75cmのローム漸移層を遺構確認面とする。

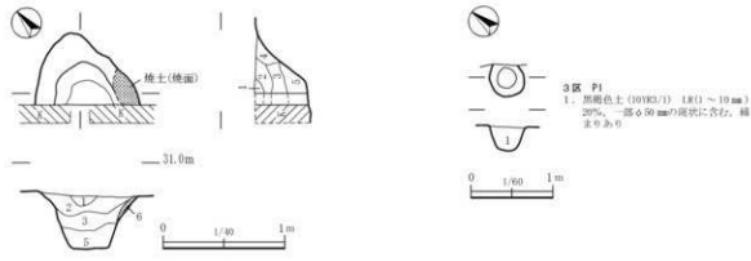
カマドのみの竪穴建物跡1軒（SI-1）、ピット1基（P1）の他、第1号竪穴建物跡（SI-1）のカマド脇に硬化面を確認した。



第12図 3区全体図

第1号竪穴建物跡(SI-1)は、北壁に現存幅約80cm、同奥行約70cmの三角形にローム層を切り込み、灰白色粘土で構築されたカマドで、最も深い部分で深さ約45cmであった。竪穴の廃絶に伴う儀礼的な破壊によるものか、遺存状態は悪い。遺構確認面で須恵器高台坏の破片1点、カマド覆土中より須恵器坏・甕など3点、土師器甕の破片12点などが出土した。また、カマドの南西脇の遺構確認面に東西長約110cm、南北長約60cm範囲で竪穴建物跡の床面状の硬化面を確認した。確認当初はこの硬化した面とカマドの組み合わせを想定したが、カマドの掘方の深さから竪穴建物跡の本体は現道の下にあると判断された。なお、この硬化面の性格については、カマドに接して所在し、カマド構築材の灰白色粘土が薄く上面に認められたことから、カマド脇に設けられた棚状の施設の可能性が考えられる。部分的な確認ではあるが、カマドの主軸方位及び他の竪穴建物跡の方位と合致する形状であることもその感を強する。本跡の須恵器高台坏と第2号竪穴建物跡(SI-2)出土の破片が接合し、両者は同一遺構の可能性がある。出土遺物から9世紀第2四半期と考えられる。

ピット1(P1)は、開口部が径約42cmの円形で、深さ約30cm、底面はほぼ平坦であった。覆土はローム粒を含む黒褐色土の単一層で、人為的埋没と考えられ、土師器甕の細片が1点出土している。



- 3区 第1号竪穴建物跡カマド
1. 黒褐色土 (10YR2/1) LR(1 ~ 2mm) 5%含む、縫まり弱い
 2. 灰褐色土 (7.5Y5/2) LR(1 ~ 5mm) 5%, 棕色土 (2.5Y6/3) (1 ~ 5mm) 5%含む、縫まりあり
 3. 灰褐色土 (3Y6/5) 棕色土 (2.5Y6/3) LR(1 ~ 20mm) 30%, 黑褐色土 (10YR2/1) 1 ~ 5mm 13%含む、縫まりあり
 4. 灰褐色土 (3Y6/5) LR(1 ~ 25mm) 20%, 棕色土 (2.5Y6/3) 8%含む、縫まりあり
 5. 黄褐色土 (10YR4/2) LR(1 ~ 5mm) + 棕色土 (2.5Y6/3) LR(1 ~ 3mm) 各 5%含む、縫まりあり
 6. 覆土 (他面?)



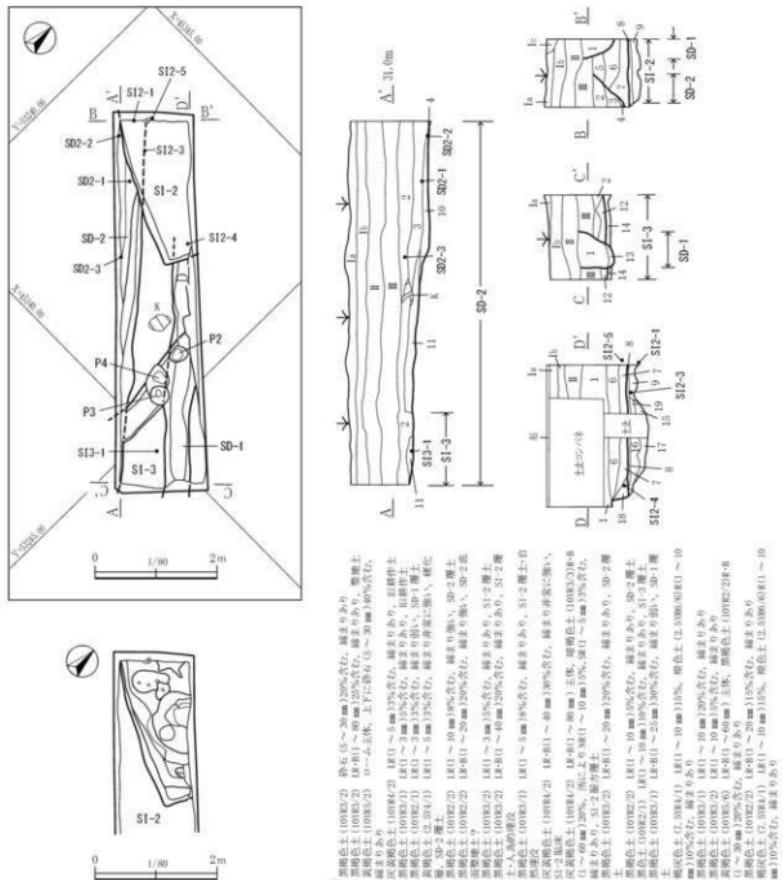
第13図 3区第1号竪穴建物跡カマド, P1, 出土遺物

(4) 4区 (第14～16図、第3・4表、写真図版4・9)

本調査区は幅約1.3m、長さ約6mである。北東約2.7mに3区が隣接する。現地表面下約100cmのローム漸移層が遺構確認面である。

堅穴建物跡2軒 (SI-2・3)、溝跡2条 (SD-1・2)、ピット3基 (P2～P4)などが確認された。

北西側に確認された第2号堅穴建物跡 (SI-2) は、南辺と東辺の一部を確認したもので、本来の規模・形状は明確にし難い。また、第1・2号溝跡 (SD-1・2) と重複しこれら



第14図 4区全体図、第2号堅穴建物跡掘方

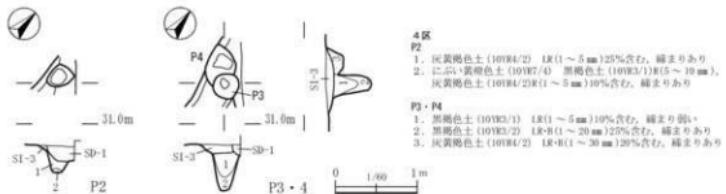
に切られていた。現存の東西長約250cm、同南北長約110cmで、南壁より推定される南北軸はN-24°-Eを示す。壁は現存高約30cmでほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面は粗掘りの後ローム主体の土で整地したもので、平坦に固く締まっていた。遺存部分にピット及びカマドは確認されなかった。覆土は4層に分層され、自然埋没の後人為的埋没と考えられる。遺物は須恵器蓋・壺・高台壺・盤・鉢・壺・甕など20点、土師器甕24点、瓦4点などが出土した。なお、現道を隔てた北東の3区で確認された第1号竪穴建物跡(SI-1)のカマドより出土の須恵器高台壺と本跡の覆土出土の破片が接合した。したがって、第1号竪穴建物跡と(SI-1)と第2号竪穴建物跡(SI-2)が同一の竪穴建物跡である可能性が高いものの、現道下にある為断定はし難い。出土遺物から9世紀第2四半期と考えられる。

第3号竪穴建物跡(SI-3)は南東部に確認したもので、掘り込みが浅い上に第1・2号溝跡(SD-1・2)と重複し、これらに切られていて、遺存状態が悪い。したがって本来の規模・形状は明確にし難いが、現存南北長約130cm、同東西長約175cmである。推定西壁に沿って幅約40cm、深さ5cm程の溝跡を確認したが、性格は不明である。床面はほぼ平坦であるが、他の竪穴建物跡に比べ硬度は低い。前記の遺存状態から覆土はほとんど遺存しなかったが、黒色土主体で自然埋没と考えられる。遺物は男瓦片と須恵器細片が各1点出土したのみで、8世紀末～9世紀前半との推定に留める。

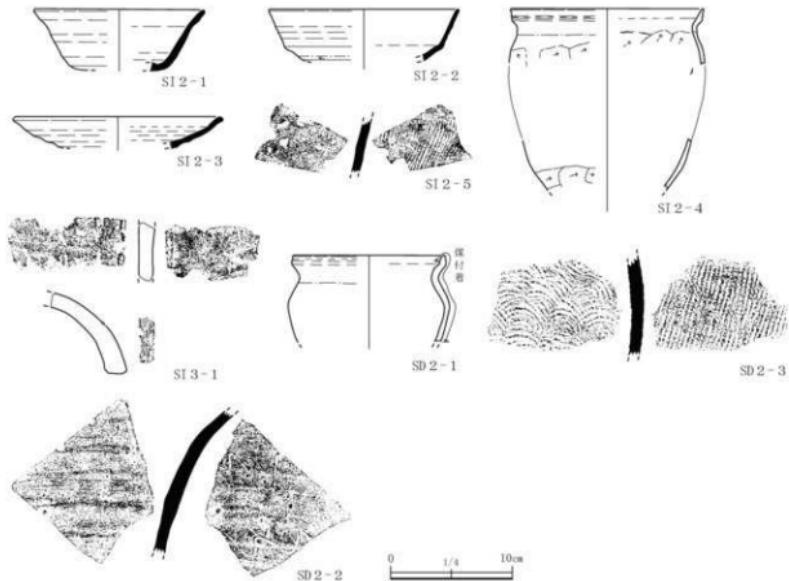
ピット2～4(P2～P4)は径25～50cmの円形もしくは楕円形で、深さ約20～55cm。いずれも第1号溝跡(SD-1)と第3号竪穴建物跡(SI-3)の下より確認された。これらの遺構より先行することは明らかだが、遺物の出土もなく、その性格は不明である。

溝跡のうち第1号溝跡(SD-1)は、覆土や遺構の状態から北西の4区、南東の6区第1号溝跡(SD-1)に連なると推定される。掘り込みが浅く、平面で確認されたのは底面近くの幅約40～45cm、深さ10cm程である。断面の土層観察によれば、上幅約60cm、深さ約60cmで逆U字状の断面形状である。覆土は1～2層に分層され、黒褐色土を主体とする自然埋没で、締まりは弱い。覆土中より須恵器蓋、土師器甕の細片が各1点出土した。

第2号溝跡(SD-2)は、遺構及び覆土状態から、北西の2区の第2号溝跡(SD-2)に連なると考えられる。調査区の南西端に位置し、南西側は調査区外に所在し、本来の規模・形状は明確にし難い。現存の上幅約52cm、深さ約50cm、壁は外傾し、逆台形の断面形状と推定される。覆土は5層に分層され、覆土中に硬化面(層)が認められ、道路跡との関係が推測される。遺物は、覆土中より須恵器壺1点・甕2点、土師器小形甕1点などが出土した。須恵器甕のうち1点は7世紀第4四半期の山田窯跡群産の可能性がある。



第15図 4区P2～P4



第16図 4区出土遺物

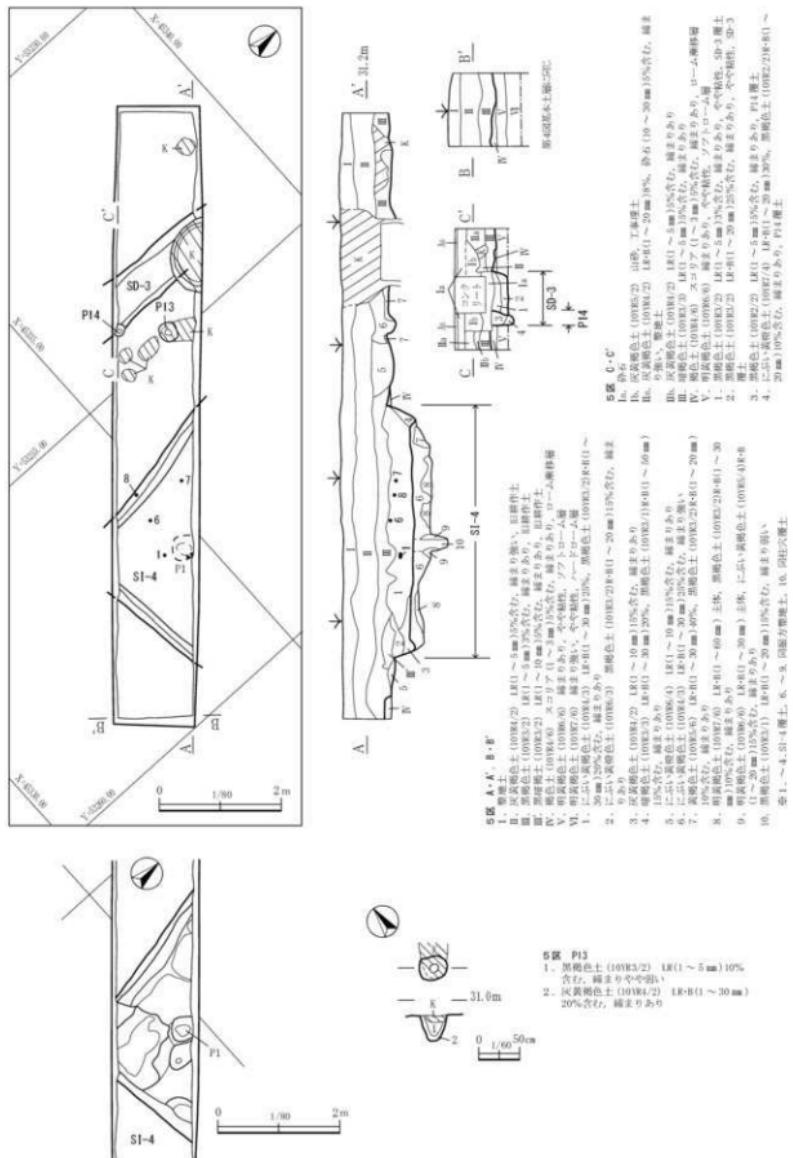
(5) 5区(第17・18図、第3・4表、写真図版5・9)

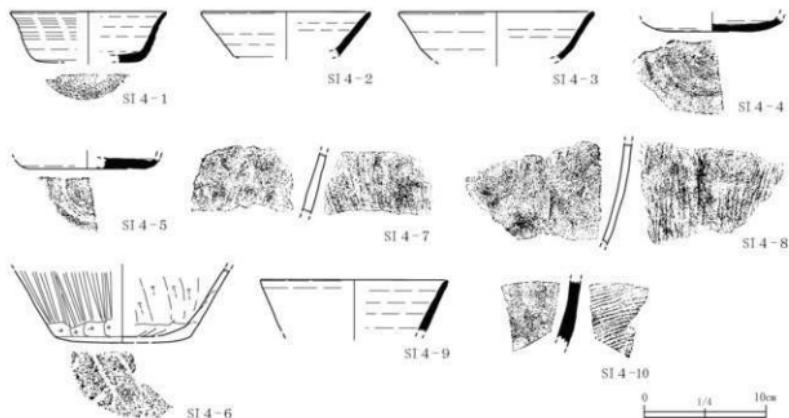
本調査区は幅約1.3m、長さ約10mである。南西約2.7mに6区が隣接する。現地表面下約70cmのローム漸移層が遺構確認面である。

堅穴建物跡1軒(SI-4)、溝跡1条(SD-3)、ピット2基(P13・P14)を確認した。

第4号堅穴建物跡(SI-4)は、南辺と西辺の各一部を確認したもので、本来の規模・形状は明確にし難い。現存東西長約160cm、同南北長約215cmで、西壁より推定される南北軸はN-13°-Wを示す。壁は現存高約25~35cmでやや外傾する。壁下に幅約17~20cm、深さ10cm程の壁溝が設けられていた。床面は粗掘りの後ローム主体の土で整地したもので、平坦で固く締まっていた。現存部分にカマドは確認されなかった。ピットは床面確認時には認められなかつたが、掘方の調査時にP 1を1基確認した。南西隅の主柱穴と思われるが、堅穴の改修に際して床面下になつたと考えられる。覆土は4層に分層された。ローム粒・塊を多く含み、人為的埋没と考えられる。遺物は、覆土中より須恵器蓋・坏・壺・甕など23点、土師器坏・甕など40点、男瓦1点などが出土した。出土遺物から8世紀第2四半期と考えられる。

第3号溝跡(SD-3)は調査区の中程を南北に横断する。南西の6区第3号溝跡(SD-3)に連なると推定される。上幅約70cm、底幅約45cm、深さ約25cmで、断面箱形である。覆土は2層に分層され、自然埋没と考えられる。遺物の出土ではなく明確な帰属時期は不明であるが、中軸が南北方向であり、覆土及び断面形状から古代の所産と推定される。





第18図 5区出土遺物

ピット13（P13）は、耕作に伴う擾乱の下から確認された。径約30cmの円形で、深さ約30cm。覆土は2層に分層され、外側が人為的埋没で柱穴の可能性がある。遺物の出土はないが、覆土の状態から古代の所産と考えられる。ピット14（P14）は、第3号溝跡（SD-3）と重複し、これを切っていた。径約20cmの円形で、深さ約27cm。覆土は2層に分層され、自然埋没と考えられる。第3号溝跡（SD-3）より後出ではあるが、遺物の出土もなく、帰属時期は不明である。

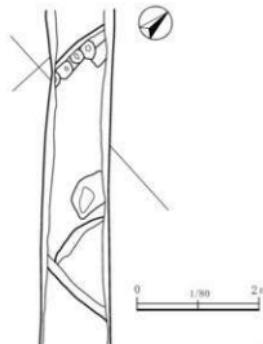
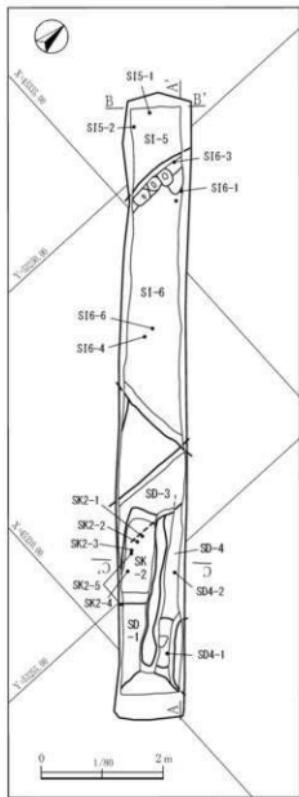
（6）6区（第19・20図、第3・4表、写真図版6・7・10）

本調査区は幅約1m、長さ約10mである。北東約2.7mに5区が隣接する。現地表面下約75cmのローム漸移層が遺構確認面となるが、多くの遺構が所在し、漸移層の遺存部分は極僅かである。

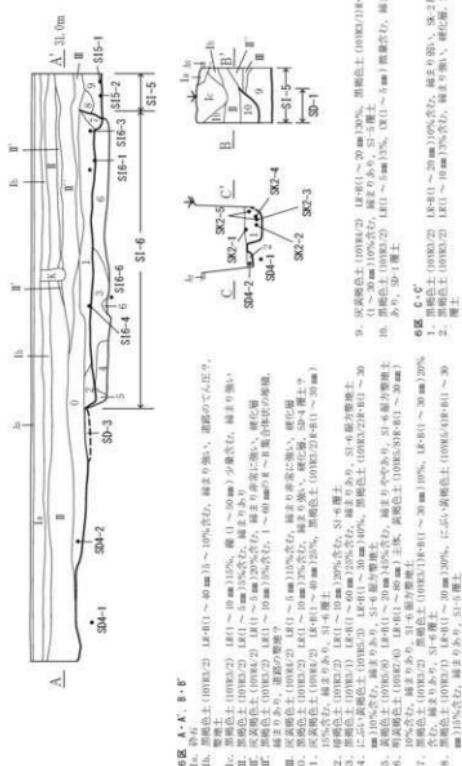
堅穴建物跡2軒（SI-5・6）、溝跡3条（SD-1・3・4）、土坑1基（SK-2）を確認した。

堅穴建物跡は2軒が重複し、第5号堅穴建物跡（SI-5）は第6号堅穴建物跡（SI-6）に切られていた。また、第5号堅穴建物跡（SI-5）は第1号溝跡（SD-1）、第6号堅穴建物跡（SI-6）は第1・3・4号溝跡（SD-1・3・4）に切られていた。第5号堅穴建物跡（SI-5）は床面の極一部（100cm×80～130cm）を確認したに過ぎず、規模・形状とも全く不明である。覆土は2層に分層され、いずれもローム粒・塊を多く含み人為的埋没と考えられる。遺物は須恵器蓋1点、土師器甕4点が出土した。出土遺物から8世紀前半頃と考えられる。

第6号堅穴建物跡（SI-6）は、西壁と南壁の一帯（長さ約100～110cm）を確認したのみで、本来の規模・形状は明確でない。それぞれの壁を延長して推定した結果、現存東西長約350cm、同南北長約320cmを測る。なお、北東約270cmの5区まで本跡が延びていないこ



第19図 6区全体図、第6号竪穴建物跡掘方



6区 A-A'、B-B'、C-C'
1. 黒褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)10%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
2. 黒褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)10%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
3. 黒褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)10%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
4. 黒褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)10%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
5. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)10%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
6. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)10%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
7. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)10%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

8. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
9. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～20mm)10%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
10. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～20mm)35%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
11. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
12. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
13. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
14. 黒褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
15. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
16. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

1. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～20mm)10%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
2. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～20mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。
3. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～20mm)35%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

4. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

5. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

6. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

7. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

8. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

9. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～20mm)10%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

10. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～20mm)35%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

11. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

12. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

13. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

14. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

15. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

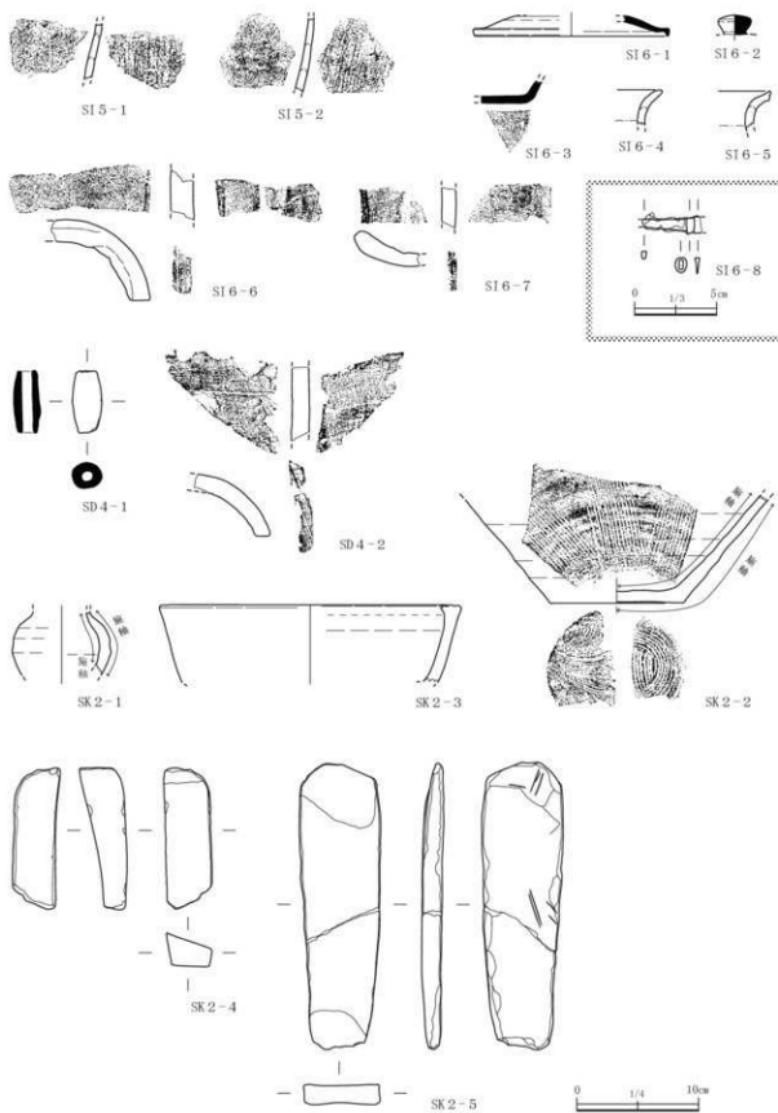
16. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

17. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

18. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

19. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。

20. 黑褐色土 (100/84-2) LF6(1～約50mm)20%含む。織込み糞、通路の印が見られる。



第20図 6区出土遺物

とから、一边350cm程の方形と推察される。壁は現存高25～35cmでやや外傾する。西壁下には幅約25cm、深さ15cm程の壁溝状の施設が認められたが、南壁下は判然としない。床面は粗掘りの後ローム主体の土で整地したもので、ほぼ平坦に固く締まっていた。カマドやピットなどは確認されなかった。覆土は3層に分層され、ローム粒・塊を多く含み、人為的埋没と考えられる。遺物は、床面及び覆土中より須恵器蓋・壺・甕など8点、土師器甕17点、女瓦1点、鉄製品（刀子）1点などが、掘方の整地土より男瓦1点が出土した。出土遺物から8世紀第3四半期と考えられる。

溝跡のうち、第1号溝跡（SD-1）は北西に並ぶ2・4区で確認された第1号溝跡（SD-1）に連なると考えられる。南東で近世の第2号土坑（SK-2）に切られていた。南西側が調査区外に所在し、全体を確認することはできなかった。現存の上幅は約50～70cm、深さ20～30cm程で、壁は外傾し、底面はほぼ平坦であった。覆土は黒褐色土主体の單一層で、自然埋没である。遺物の出土はなかった。第3号溝跡（SD-3）は遺存状態が悪く判然としないが、北東に隣接する5区の第3号溝跡（SD-3）に連なると考えられる。現存の上幅約70cm、深さは5cm程である。断面は鍋底状で、覆土はローム粒・塊を多く含む黒褐色土である。遺物の出土はなかった。第4号溝跡（SD-4）は、上幅約30～35cm、深さ10cm程で、壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。なお、調査区の南東端では底面に長さ約82cm、幅約20cmの楕円形で、深さ12cm程の凹みがあり、須恵質の土錐が1点出土した。本跡ではこれ以外に男瓦の小片1点が出土したのみである。また、本跡は調査区の中程で北東に逸れて調査区外に延びると考えられるが、覆土は0層とした硬化層であり、道路跡との関係が推察される。

近世の第2号土坑（SK-2）は、第1号溝跡（SD-1）と重複し、これを切っていた。平面形は、北西・南東長約160cm、同北東・南西長約50cmの長方形、深さ30cm程で、底面はほぼ平坦であった。壁は、側面は直立ぎみで両小口部分は外傾していた。覆土は黒褐色土主体の單一層で、締まりは弱い。遺物は、覆土中より近世の陶器油壺・擂鉢、瓦質土器火鉢、砥石（大・小）各1点、土鍋2点などの他、古代の須恵器高台壺・壺など3点、女瓦1点の小片が出土した。また、炭化した木材片も混入していた。陶器油壺の割れ口や大形の砥石は、折れた後的一方が被熱を受けて変色していた。陶器・土器は破片であり、砥石も破損して投棄されたと考えられる。したがって、本跡はゴミ穴的な性格の可能性が高く、ゴミの焼却処理や火災ゴミの処理が考えられる。出土遺物から18世紀後葉以降と考えられる。（水野）

第3表 出土遺物観察表

区	番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	推定値 [] 現存値		備考
										手法の特徴	出土位置	
2区	P10-1	須恵器	瓶	—	[7.7]	(15.2)	長石	内外:灰褐色 (7.5YR 5/2)	普通	ロクロ整形、体部下位内 外側ヘラ削り・ヘナダ ラ削り	No.1	
	SD2-1	須恵器	高台坪	—	[2.9]	—	長石・海綿 骨針	内外:灰色 (5Y1/1)	普通	ロクロ整形、底部表面へ ラ削り	No.3	木葉下窓跡群座 SC第4四半期
	SD2-2	須恵器	甕	—	[14.3]	—	長石・粗砂 粒 (φ 8 mm)	内:灰褐色 (3Y1/0), 外:黒褐色 (7.5YR 3/1), 灰白色 (10YR 7/1)	普通	ロクロ整形、体部表面平 行文引き目、同内面当其 痕ナダ消す	No.1	
	SD2-3	須恵器	甕	—	[15.2]	—	長石・黑色 粒	内:灰色 (5Y6/1), 外:灰白色 (6Y7/0)	普通	ロクロ整形、体部表面平 行文引き目、同内面不 明、内外面に自然剥付着 付	No.2	
	SD2-4	須恵器	甕	—	[8.5]	—	長石・黑色 粒・海綿 骨針	内:灰褐色 (7.5YR 5/2), 外:黒褐色 (2.5Y3/2)	普通	ロクロ整形、体部表面平 行文引き目、無文当其痕 ナダ消す	覆土	剥れ口が擦られ ており、既石等 に転用か?
3区	番号	種別	器種	口径	幅	厚さ	重さ	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
	SD2-5	鉄製品	不明	14.3	1.1 ~ 1.3	0.2	16.4	—	—	完全に形状の突起が1カ所 認められる	No.4	
	SI1-1	須恵器	高台坪	(15.8)	(6.0)	(9.0)	長石・海綿 骨針	内外:灰色 (10Y5/1)	普通	ロクロ整形、底部表面へ ラ削り 前高台・ヘラ記 号「一」	No.1, S12 覆 土	木葉下窓跡群座 SC第2四半期
	SI1-2	土師器	甕	—	[3.0]	(8.2)	石英・長石・ 雲母	内:灰褐色 (7.5YR 4/1), 外:黒褐色 (7.5YH4/1)	普通	体部表面ヘラ削り、底部 外面部木葉紙、体・底内 面剥げナダ	カマド覆土	新治産
	SI1-3	土師器	甕	—	[0.8]	(7.4)	石英・長石・ 雲母	内:灰褐色 (7.5YR 5/2), 外:黒褐色 (7.5Y3/2)	普通	底部外面部に木葉紙、同内 面剥げナダ・ヘナダ	カマド覆土	新治産
4区	PI-1	土師器	甕	—	[2.0]	—	石英・長石・ 雲母	内:白色 (7.5YR 7/6)	普通	口辺部内外面横ナダ仕 上げ	覆土	常陸型、新治産 9C前半
	SI2-1	須恵器	坪	(14.0)	(5.0)	(8.2)	石英・長石・ 海綿骨針	内外:浅黄色 (2.5Y 7/3)	普通	ロクロ整形、底部ヘラ起 こし後ヘラ削り	No.2, 覆土	木葉下窓跡群座 SC第2四半期
	SI2-2	須恵器	高台坪	(15.6)	[4.3]	—	石英・長石・ 海綿骨針	内:灰褐色 (10YR 4/1), 外:にぶい黄 褐色 (10YR5/2)	普通	ロクロ整形、外面部の体部 下位倒伏し、高台近くか?	覆土	木葉下窓跡群座
	SI2-3	須恵器	甕	(17.0)	[2.6]	—	石英・長石・ 雲母	内:灰褐色 (10YR 6/2), 外:灰暗褐色 (2.5Y5/2)	普通	ロクロ整形	No.1	木葉下窓跡群座
	SI2-4	土師器	甕	(15.8)	[4.6]	—	石英・長石・ 雲母	内:灰褐色 (10YR 3/3), 外:黒褐色 (10YR3/2)	普通	口辺部内外面横ナダ仕 上げ, 体部内面横ナダ, 外面部ヘラ削り後ナダ	No.4, 覆土	内外面に保付首 輪型、新治産
5区	SI2-5	須恵器	甕or鉢	—	[4.4]	—	石英・雲母 赤褐色粒	内:にぶい褐色 (10YR7/4), 外:灰褐 色 (7.5YR6/2)	あまい 不明	ロクロ整形、体部表面平 行文引き目、内面帯罫	No.3	新治窓跡群座
	SD2-1	土師器	小形甕	(12.6)	[7.1]	—	石英・長石・ 雲母	内:にぶい黄褐色 (7.5YR6/4), 外:黒 褐色 (5YR3/1)	普通	輪縁構造、口辺部内外面横 ナダ仕上げ, 体部内面に ヘナダ, 同外面粗いナダ	No.2	外面部の口辺・体 部, 口辺部の切 上部煤付着跡 型, 新治産
	SD2-2	須恵器	甕	—	[11.2]	—	長石	内:褐色 (7.5YR 4/1), 外:青暗灰色 (10YR4/1)	普通	ロクロ整形、口辺部外 面ヘラ削り波状化, 同内 面に陰文が見られる	No.1	9C 第2 ~ 3四半 期, 木葉下窓跡 群座
	SD2-3	須恵器	甕	—	[8.1]	—	長石・石英	内:灰色 (NA4/0), 外: 黒色 (N2/0)	普通	ロクロ整形、体部表面格 子文引き目, 同内面同心 円文当其痕	No.3	山田窓跡群座 SC第4四半期
	SI3-1	瓦	男瓦	[5.2]	[9.0]	1.5	胎土	凸:灰褐色 (10YR 6/1), 凹:灰黄色 (2.5Y6/2)	普通	泥塑タグラ造り, 輪縁 面化粧, 凹面横ナダ, 凸 面横, 凹にヘナダ	No.1	木葉下窓跡群座
5区	SI4-1	須恵器	坪	(12.8)	(4.2)	(8.8)	石英・長石・ 黑色粒	内:灰白色 (10YR 7/1), 外:暗灰褐色 (3N1/0)	良好	ロクロ整形、底部表面へ ラ削り, 外面に陰灰を認 める	No.4	木葉下窓跡群座 SC第2四半期
	SI4-2	須恵器	坪	(13.8)	[3.7]	(8.2)	石英・長石	内外:灰白色 (2.5Y 8/1)	普通	ロクロ整形	覆土1区	
	SI4-3	須恵器	坪	(16.0)	[4.0]	—	石英・長石・ 海綿骨針	内:灰褐色 (2.5Y 4/1)	普通	ロクロ整形	覆土2区	木葉下窓跡群座
	SI4-4	須恵器	坪	—	[1.2]	(11.6)	石英・長石・ 海綿骨針	内:灰褐色 (2.5Y 7/2)	普通	ロクロ整形、底部表面へ ラ削り	覆土1区	木葉下窓跡群座 SC第2四半期

第3章 調査の成果

区	番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	単位 cm・g () 検定値 [] 現存値		備考
										手法の特徴	出土位置	
5区	S14-5	須恵器	壺	—	[0.8]	[12.0]	石英・長石・ 海綿骨針	内外：浅黃褐色 (7.5YR8/4)	やや あまい	ロクロ整形、底部外面へ ラナダ	覆土1区	木葉下宮跡群座
	S14-6	土師器	甕	—	[6.2]	[11.2]	石英・長石・ 雲母	内：にぶい黄褐色 (10YR7/3), 外：黒褐色 (5YR2/2)	普通	体部外表面状具による 縦のミガキ, 同内面と底 部内面へラナダ, 底部外 面木葉	覆土1区	底部外面に灰白 色粘土薄く付着 新治座
	S14-7	土師器	甕	—	[4.8]	—	石英・長石・ 雲母・橙色粒	内：にぶい赤褐色 (2.5YR5/4), 外：赤 褐色 (2.5YR4/8)	普通	内面横ナダ, 外面棒状具 による縦のミガキ	—	新治座
	S14-8	土師器	甕	—	[8.3]	—	石英・長石・ 雲母	内：にぶい黄褐色 (10YR7/4), 外：灰褐色 (7.5YR4/2)	普通	内面横ナダ, 外面棒状具 による縦のミガキ	No.5, 覆土	新治座
	S14-9	須恵器	盃	[15.4]	[4.3]	—	石英・長石・ 細砂・黒色 粒立つ	内：オリーブ黄 (5Y 6/3), 外：浅黄色 (5Y7/4)	良好	ロクロ整形, 内外面に陽 灰, 口縁の焼成前の欠損 部分に陰灰を認めらる	覆土2区	—
	S14-10	須恵器	甕	—	[5.6]	—	石英・長石・ 黒色粒, 海 綿骨針	内外：黄灰色 (2.5Y 6/1)	普通	ロクロ整形, 体部外面平 行文引き目, 内面無文当 具痕	覆土1区	木葉下宮跡群座
	S15-1	土師器	甕	—	[4.7]	—	石英・長石 雲母	内：にぶい褐色 (7.5YR6/3), 外：暗 赤褐色 (5YR3/2)	普通	体部外表面状具による 縦のミガキ, 同内面横に ヘラナダ	No.1	新治座
	S15-2	土師器	甕	—	[6.3]	—	石英・長石・ 雲母	内：褐色 (7.5YR 7/6), 外：にぶい黃 褐色 (10YR7/2)	普通	体部外表面状具による 縦のミガキ, 同内面横に ヘラナダ	No.2	新治座
	S16-1	須恵器	盃	[16.0]	[1.7]	—	石英・長石・ 海綿骨針	内：灰褐色 (5Y5/0)	普通	ロクロ整形, 甲の内面へ ラナダ	—	木葉下宮跡群座
	S16-2	須恵器	盃	ツマミ 2.8	[1.6]	—	石英・長石・ 海綿骨針	内：灰褐色 (5Y6/1)	普通	ロクロ整形, 上部が僅か に円筒形に膨らむ, 複室 珠2つ	覆土	木葉下宮跡群座, SC第3四半期
	S16-3	須恵器	壺	—	[1.9]	—	石英・長石	内：灰白色 (5Y 7/1)	やや あまい	ロクロ整形, 底部外面へ ラナダ	—	—
	S16-4	土師器	甕	—	[2.9]	—	石英・長石・ 雲母	内：にぶい褐色 (7.5YR7/4), 外：に ぶい褐色 (7.5YR 6/3)	普通	口辺部内外面横ナダ仕 上げ	No.2	新治座
	S16-5	土師器	甕	—	[3.3]	—	石英・長石・ 雲母・赤褐色 色粒	内：にぶい黄褐色 (10YR7/4)	普通	口辺部内外面横ナダ仕 上げ	覆土	常陸型 新治座
6区	SK2-1	陶器	油壺	—	[5.4]	—	精良	内：黒褐色 (7.5YR 3/1), 外：にぶい赤 褐色 (5YR4/3)	普通	ロクロ成形, 内外面に凹 輪を施す	覆土・美濃座 1SC	割れ口に保付着
	SK2-2	陶器	擂鉢	—	[9.0]	[11.2]	精良・長石	釉色：淡黄色 (2.5Y 6/4), 色釉：輪赤 褐色 (5YR2/3)	普通	ロクロ成形, 底部希切 り, 内面14条1單の工 具で日々削り, 内外面に 輪赤を施す	覆土・美濃座 1SC代	—
	SK2-3	土器 (瓦質)	火鉢	(24.6)	[6.2]	—	石英・長石・ 黑色粒	内外：黑色 (6Y2/0)	普通	ロクロ成形, 体部外に粗 いミガキを施す	No.4	在地座 1SC
	番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
	S16-6	瓦	男瓦	[3.5]	[10.3]	2.0	石英・長石	凸面：灰色 (10Y4/1)	普通	横絞り, 回面3面化粧, 凹面布目, 凹面横ナダ	No.3	—
	S16-7	瓦	女瓦	[3.1]	[6.1]	1.4	石英・長石	凸：暗灰色 (5Y1/0), 凹：黑色 (N1/0)	良好	横絞り, 侧端3面化粧, 凹面布目, 凹面ナダ	覆土	—
	SD4-2	瓦	男瓦	[7.8]	[8.2]	1.2～ 1.4	石英・長石・ 海綿骨針	凸：浅黄色 (2.5Y 7/4), 凹：浅黄色 (2.5Y7/3)	普通	横絞り, 回面布目, 凸 面横ヘラナダ	No.2	木葉下宮跡群座
	番号	種別	器種	長さ	最大径	重さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
SD4-1	土製品	管状 土鍬	5.2	2.3	27.0	石英・長石・ 海綿骨針	灰黄色 (2.5Y7/2)	普通	棒に粘土を巻き付けた もののやり跡彫	No.1	礼括 0.9～1. 須賀質, 木葉下 宮跡群座	
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
S16-8	鉄製品	刀子	[3.4]	0.4～ 1.0	0.3	3.7	—	—	刃部の大部分と中子の 先端を丸根, 鎌が遺存	No.5	—	
SK2-4	右製品	砥石	11.8	3.8	3.1	148.0	—	—	上・下・側面の3面使用	No.2	在地座?一方は 大根	
SK2-5	右製品	砥石	24.2	6.8	1.7	506.0	—	—	上・下・側面の4面使用	No.1・3	在地座?分割後 熱を受けて変色	

第4章 総括

第1節 土地利用の変遷

堀遺跡における発掘調査は、試掘・確認調査を含め夥しい数が重ねられ、今次調査区は第80地点となる（川口編2020）。これまでの調査では縄文時代から近世にわたる土地利用の痕跡が確認されているが、今回は奈良・平安時代から中・近世の土地利用が確認された。

（1）奈良・平安時代

該期の遺構は8世紀から9世紀中葉にかけての堅穴建物跡6軒（SI-1～6）、土坑1基（SK-1）、溝跡1条（SD-3）、ビット7基（P1～P4・P10～P12）などである。

堅穴建物跡は、8世紀前半代と思われる第5号堅穴建物跡（SI-5）、同第2四半期の第4号堅穴建物跡（SI-4）、同第3四半期の第6号堅穴建物跡（SI-6）、9世紀第2四半期の第1・2号堅穴建物跡（SI-1・2）の順に構築された。なお、第1号堅穴建物跡（SI-1）のカマドと第2号堅穴建物跡（SI-2）の南壁は約2.7mの現道を隔てて所在し、位置的に同一の建物跡の可能性がある。また、第1号堅穴建物跡（SI-1）より出土の須恵器高台壺が第2号堅穴建物跡（SI-2）出土のものと接合し、両者の出土遺物の年代観からもその可能性を高める。各堅穴建物跡は、調査区の幅が1～1.3mと狭いことから、本来の規模・形状を明確にし難い。

なお、今次調査区の北西方約180mの第2・9地点では、7世紀末～8世紀代は堅穴建物主体の集落であったが、9世紀代には掘立柱建物や柵列、区画構が造営され一般集落とは異なる土地利用となる（川口編2020）。しかし、遺跡の縁辺部に位置する今次調査区付近は9世紀に至っても堅穴建物主体の集落が継続して営まれた。また、今次調査区の南西に隣接する第69地点の試掘調査においても8世紀後半～9世紀前半の堅穴建物跡が5軒確認されていて、濃密な集落跡の存在を示している。

第3号溝跡（SD-3）は遺物の出土はなかったが、軸線の方位や覆土などから該期の遺構と判断した。第1号土坑（SK-1）も同様に覆土などから推定した。ビット1（P1）は土師器甕、ビット10（P10）は須恵器甕の破片が出土し、他のビット2～4・11・12（P2～P4・P11・P12）は覆土から判断した。

遺物は、須恵器蓋・壺・高台壺・盤・櫃・壺・甕、土師器壺・甕の他瓦（男瓦・女瓦）、土製品（土鍤）、鉄製品（刀子・不明）などが出土した。須恵器は新治窯跡群産が1点の他は概ね木葉下窯跡群産と考えられ、瓦類もほぼ同様と思われる。土師器甕は大部分が胎土に雲母細片を含み、新治産と考えられる。また、土鍤は長さ5.2cm、重量27g、佐々木氏の分類によれば「管状土鍤II B類」「河川流水域で用いられたアユ刺網用の鍤」と推定されている（佐々木2016）。集落跡出土の土鍤はそのほとんどが土師質であり、須恵質のものは貴重な存在である。幸にも類例が極近に見られた。今次出土地点の北方約90m、同じ堀遺跡の第18地点6区の堅穴建物跡（SI-2）より1／2程の破片が出土している。長さ5.5cm、推定重量30g程と大きさも類似している（渥美・高野編2009）。また、胎土もほぼ同様で木葉下窯跡群産と考えられる。かつては供給地である木葉下窯跡群での出土（大川・大

森1962) が知られるのみであったが、この堀遺跡で複数例が確認されたことになる。なお、窯跡出土の資料は、木葉下窯跡群三ヶ野支群瓶焼土第2号窯跡出土で、長さ約11.4cm、径3.3～3.5cm、孔径1.6cm、佐々木氏の分類では「大型管状土錘」にあたり、河口付近での「サケの地曳網漁」に用いられたと推定されている。須恵質の土錘の存在は供給地と供給先の密接な関係を示しており、これもこの堀遺跡のもつ性格の一端を示すものであろう。

(2) 中・近世

今次調査区では、共伴遺物などから中世遺構と判断し得るものはなかった。近世では、18世紀代の陶器や土器、砥石などが出土した第2号土坑(SK-2)のみである。また、現道南西側の調査区2・4・6区では、道路関連と見られる溝や硬化面(層)が確認された。いずれも古代の遺物が出土したもの、出土状況などから各溝跡の帰属時期を示すものではないと考えられる。第1・2号溝跡(SD-1・2)は、9世紀後半期の第2号竪穴建物跡(SI-2)を切っており、これ以降の開削と判断される。また、この第2号竪穴建物跡(SI-2)は自然埋没の途中で人為的に埋められていて、溝跡(道路)の開削に伴う造成の可能性もある。なお、3条の溝跡のうち第2・4号溝跡(SD-2・4)は覆土中に硬化面(層)が認められるのに対し、第1号溝跡(SD-1)にはそれが見られないことから、前2者よりは後出と考えられる。また、第1号溝跡(SD-1)は前述の第2号土坑(SK-2)に切られており、それ以前の所産と考えられる。一般に道路状遺構においては、所謂「波板状压痕」の存在が指標の一つとされるが、2区に見られるような円形もしくは梢円形の凹み状の硬化面(層)が不規則に分布する場合もある。同じ市道渡里31号線関連の第18地点2～4区においても同様の硬化面(層)や現道に沿って延びる溝跡が確認されている(源美・高野編2009)。

これらのことから、詳細な帰属時期や道路幅員などは明確にし難いが、古代末ないし中世初め頃から現在まで使用されている道路であり、改修に伴って、多少のずれは生じるもの、ほぼ同一ルートを通っていたと考えられる。また、側溝を設けた直線的道路であり、集落内の自然発生的な生活用道路とは異なる性格をもつと考えられる。とするならば、前項で述べた、第2・9地点の掘立柱建物や柵列、区画溝が造営された公的機関を思わせる遺構群を斜めに横切るようなことはしなかったと推察される。おそらくは、公的機関が消滅して以降の開削と推察され、第2号竪穴建物跡(SI-2)との重複関係を加味すると古代末～中世初めの所産と考えられる。

2区北西端で馬の歯牙が出土した、第1号性格不明遺構(SX-1)を確認した。道路脇の祭祀的埋納を考慮して調査を進めたが、他に遺物は全く認められなかった。また、第2号溝跡(SD-2)の覆土に見られた硬化面が本跡の付近には認められず、近世以降の埋葬の跡と推定される。細い道と交差する脇にあり、あるいはかつて馬頭観音などが祭られたいたのかもしれない。

6区の第2号土坑(SK-2)は遺物の出土状況からゴミ穴的なものと推察されるが、砥石や陶器油壺は破損後に被熱を受けた痕跡があり、炭化した木材片が含まれていたことからゴミを焼却したか、火災のゴミを処理した可能性も否めない。また、江戸時代中期には付近に集落が存在した証となろう。

(水野)

【引用・参考文献】

- 瀬美賀吾・高野浩之編
2009『報道跡（第18地点） 市道渡里31・41号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 『渡里町遺跡（第8地点） 市道常磐23, 31, 307号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 2012『報道跡（第36地点） 市道渡里43・205号線道路改良及び公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 瀬美賀吾・林 邦雄編
2009『報道跡（第16地点第1次調査） 一市道渡里48号線公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市教育委員会
- 井 博幸・小宮山達夫
1999『第7章 内原周辺の主要古墳と出土遺物』『牛伏4号墳の調査』国士館大学・牛伏4号墳調査団
- 井上義安編
1990『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡発掘調査会
- 1995a『水戸市台渡里廃寺跡 都市計画道路3・6・30号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会
- 1995b『水戸市報道跡 堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市報道跡発掘調査会
- 大川清・大森信英
小川和博・大須淳志編
1962『「戸木巣栗下町三ケ野第2号竪堀」発掘結果報告書』水戸市史編さん室
- 2006『「台渡里遺跡一集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」』水戸市教育委員会・有限会社日考研茨城
- 2008『「報道跡（第9地点）一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」』水戸市教育委員会
- 『平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会
- 川口武彦・瀬美賀吾編
川口武彦
2007『「台渡里廃寺跡の文字瓦一駿馬考古資料館所蔵資料調査中間報告（2）一」』明治大学古学大学研究所紀要 第3号 明治大学古学大学研究所
- 2006『「水戸市台渡里廃寺跡一律令国家の權威を象徴する寺院と其葺きの正倉一」』埋蔵文化財センター第21回企画展 2006発掘と発見 茨城県内の発掘調査速報展』取手市埋蔵文化財センター
- 2008『「報道跡（第9地点区画N1～12）一造成地内における個人住宅建築に伴う平成19～21年度市内遺跡発掘調査報告書一』』水戸市教育委員会
- 川口武彦ほか編
瓦吹 堅
2005『「台渡里廃寺跡 範囲確認調査報告書」』水戸市教育委員会
- 1991『「水戸市台渡里廃寺跡Ⅲ観音堂山・南方・長者山の性格について」』『婆良岐考古』第13号 婆良岐考古同人会
- 栗原 悠
2018『第二章 水戸市愛宕山古墳の測量調査（速報）』『茨城県中央部の古墳調査一測量報告（墳丘・石室・遺物）一 羽黒古墳 愛宕山古墳 三ツ塚古墳群 德化原古墳 附・磯崎小学校敷地内第1号墳』茨城大学人文社会科学部考古学研究室
- 黒澤彰哉
1998『常陸国那賀郡における寺院と官衙について』『茨城県立歴史館報』第25号 茨城県立史館
- 佐々木藤雄・林 邦雄編
2000『「台渡廃寺跡と那賀郡衙」』『文字瓦と考古学』国士館大学実行委員会
- 2008『「台渡里遺跡（第39次調査）一公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」』水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄ほか編
2007『「アラヤ遺跡（第2地点）一市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」』水戸市教育委員会
- 2008『「渡里町遺跡（第5地点）一市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」』水戸市教育委員会
- 佐々木義則
2007『「常陸型焼の生産と流通－奈良時代以前の様相－」』『婆良岐考古』第29号 婆良岐考古同人会
- 2013『「木葉下窓跡群須恵器有台杯・有台壺蓋・有台盤の編年」』『婆良岐考古』第35号 婆良岐考古同人会
- 2016『「茨城県における奈良・平安時代漁網鍤の分類とその用途」』『婆良岐考古』第38号 婆良岐考古同人会
- 高井悌三郎
高野浩之ほか編
1964『常陸台渡里廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』茨城県教育委員会
- 2008『「渡里町遺跡（第6地点） 市道常磐34、275号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」』水戸市教育委員会
- 田中 祐か
2018『茨城県中央部の古墳調査一測量報告（墳丘・石室・遺物）一 羽黒古墳 愛宕山古墳三ツ塚古墳群 德化原古墳 附・磯崎小学校敷地内第1号墳』茨城大学人文社会科学部考古学研究室
- 外山泰久
間宮正光・米川暢敬編
1993『「アラヤ前構造（水戸市渡里町）をめぐって」』『常総の歴史』13 塗書房
- 2015『「報道跡（第4地点）一集合住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」』水戸市教育委員会
- 吉岡敏和ほか
米川暢敬ほか編
2001『「20万円の1地質図幅「水戸」（第2版）」』地質調査所
- 2016『「渡里町遺跡（第22地点）一集合住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」』水戸市教育委員会
- 波邊久生編
2011『「報道跡（第3地点第2次調査）一宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」』水戸市教育委員会

第4表 出土遺物一覧表

出土地点		出土遺物			古墳		奈良・平安		中世		近世		不明		総計					
区	遺構名	種別	器種	産地	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体	小計	破片	個体					
1 区	A区表土	瓦	女瓦	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
2 区	B区	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0				
2区	P19	須恵器	瓢	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SD-2	土師器	环	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SI-1	須恵器	瓢	新治塚	0	6	6	0	0	0	0	0	0	0	0	6				
	SX-1	環	蓋	-	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2				
	SI-1	須恵器	高台环	木塙下室跡群塚	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	P1	鉄製品	不明	木塙下室跡群塚	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1				
3区	SI-2	須恵器	馬・歯	-	0	11	11	0	0	0	0	0	0	0	0	11				
	SI-2	土師器	环	-	0	7	7	0	0	0	0	0	0	0	0	7				
	SI-2	高台环	木塙下室跡群塚	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SI-2	瓦	环?	-	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2				
	SI-2	瓦	甕	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SI-2	土師器	甕	新治塚	0	12	12	0	0	0	0	0	0	0	0	12				
	SD-1	土師器	甕	新治塚	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SD-2	須恵器	甕	木塙下室跡群塚	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SD-2	土師器	小形甕	新治塚	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	表土中	須恵器	环	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
4区	SI-4	須恵器	高台环	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SI-4	土師器	甕	-	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2				
	SI-4	土師器	甕	新治塚	0	38	38	0	0	0	0	0	0	0	0	38				
	SI-4	瓦	男瓦?	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SI-4	瓦	鐵灰灰?	那珂川中流?	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SI-5	須恵器	甕	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SI-5	土師器	甕	新治塚	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	4				
	SI-6	須恵器	甕	木塙下室跡群塚	0	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	3				
	SI-6	土師器	甕	-	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	4				
	SI-6	瓦	甕	新治塚	0	17	17	0	0	0	0	0	0	0	0	17				
5区	SD-4	土製品	管状土鍼	木塙下室跡群塚	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SD-4	瓦	男瓦	木塙下室跡群塚	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SK-2	土器	刀子	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SK-2	瓦	管状土鍼	木塙下室跡群塚	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	SK-2	陶器	油壺	瀬戸・美濃產	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	1				
	SK-2	石製品	標鍼	瀬戸・美濃產	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	1				
	SK-2	土器	不明	在地産?	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	1				
	SK-2	土器	火鉢	在地産?	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	1				
	SK-2	石製品	砥石	在地産?	0	0	0	0	2	2	0	2	2	0	2	2				
	SK-2	土器	鏡?	-	0	0	0	0	1	1	0	1	1	0	1	1				
6区	表土中	須恵器	高台环	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
	表土中	須恵器	甕	-	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1				
總 計					1	0	1	214	7	221	0	0	0	8	2	10	0	1	1	233

写 真 図 版

写真図版 1



A. 1 A + 1 B 区全景 (南東から)



B. 1 A 区全景 (北西から)



C. 1 B 区全景 (南東から)



D. 1 A 区 P 5 完掘状況 (南東から)



E. 1 A 区 P 5 土層断面 (南東から)



F. 1 A 区 P 6 完掘状況 (南東から)



G. 1 A 区 P 7 完掘状況 (南東から)

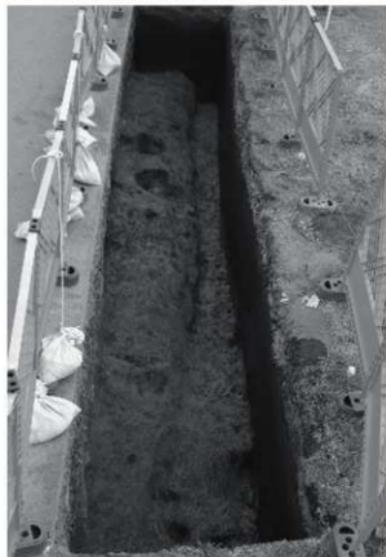
写真図版 2



A. 1B区第1号土坑完掘状況（南東から）



B. 1B区第1号土坑土層断面（南から）



C. 2区全景（北西から）



D. 2区第2号溝跡土層断面C-C'（南東から）



E. 2区第2号溝跡土層断面B-B'（北西から）



F. 2区P10完掘状況（北西から）



G. 2区P11完掘状況（北西から）

写真図版 3



A. 2区第1号性格不明遺構動物歯牙下層出土状況（上から）



B. 2区第1号性格不明遺構完掘状況（北東から）



C. 2区第1号性格不明遺構動物歯牙上層近景（南東から）



D. 2区第1号性格不明遺構動物歯牙下層近景（南東から）



E. 3区全景（北西から）



F. 3区P1完掘状況（南から）



G. 3区第1号竪穴建物跡カマド完掘状況（南西から）



H. 3区第1号竪穴建物跡カマド土層断面（南東から）

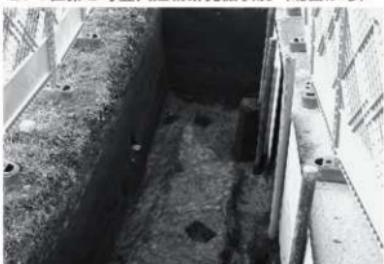
写真図版 4



A. 4区全景（南東から）



B. 4区第2号竪穴建物跡完掘状況（北西から）



C. 4区第2号竪穴建物跡掘方完掘状況（南東から）



D. 4区第2号竪穴建物跡掘方土層断面（南東から） E. 4区第3号竪穴建物跡完掘状況（南東から）



F. 4区第1・2号溝跡完掘状況（北西から）



G. 4区南東面土層断面（北西から）



A. 5区全景（南東から）



B. 5区第4号竪穴建物跡完掘状況（南東から）



C. 5区第4号竪穴建物跡掘方完掘状況（南東から）



D. 5区第4号竪穴建物跡土層断面（北西から）



E. 5区第4号竪穴建物跡掘方土層断面（南から）



F. 5区第3号溝跡完掘状況（南から）



G. 5区第3号溝跡土層断面（北から）

写真図版 6



A. 6区全景（南東から）



B. 6区第5・6号竪穴建物跡完
掘状況（北西から）



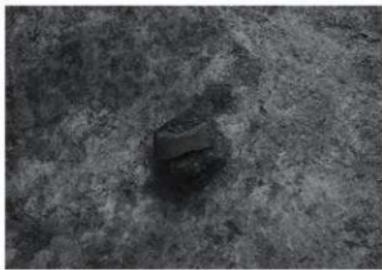
C. 6区第5・6号竪穴建物跡掘
方完掘状況（南東から）



D. 6区第5・6号竪穴建物跡土層断面（南西から） E. 6区北西面土層断面（南東から）



F. 6区第6号竪穴建物跡掘方土層断面（西から）



G. 6区第6号竪穴建物跡遺物出土状況（南東から）



A. 6区第4号溝跡・第2号土坑完掘状況（南東から）



B. 6区第4号溝跡遺物出土状況（南東から）



C. 6区第3・4号溝跡完掘状況（北西から）



D. 6区第2号土坑遺物出土状況（北東から）



E. 基本土層（5区南東面・北西から）



F. 調査前状況（南東から）

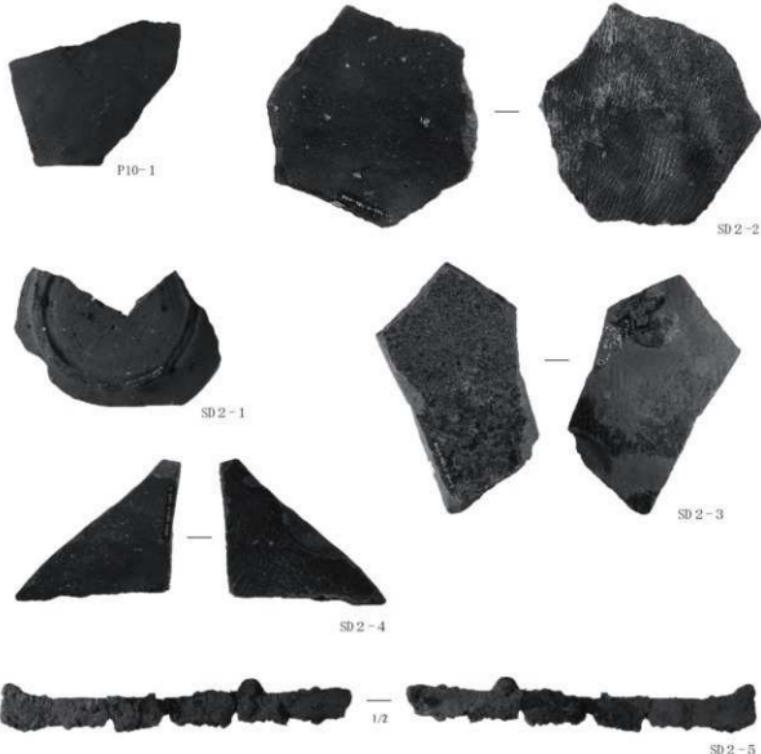


G. 調査前状況（北西から）



H. 調査終了状況（北西から）

写真図版 8



2区出土遺物

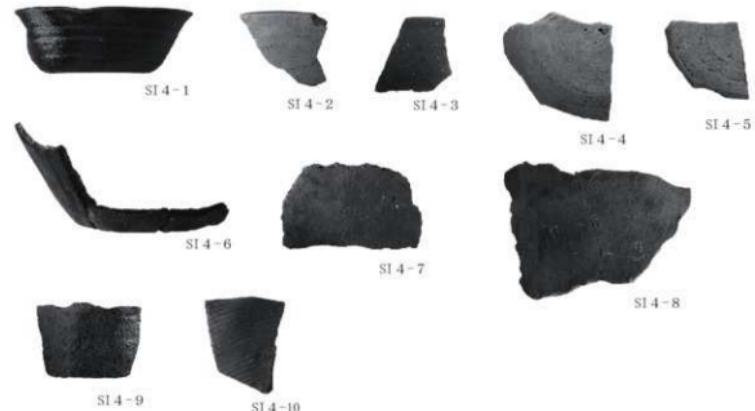


3区出土遺物

写真図版 9



4区出土遺物



5区出土遺物

写真図版 10



6区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ほりいせき (だいはちじゅうちん)						
書名	堺遺跡（第80地点）						
副書名	一市道渡里31号線（その2）狭あい道路整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－						
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第122集						
編集者名	廣松滉一・水野順敏						
著者名	廣松滉一・水野順敏						
編集機関	株式会社日本窓業史研究所	所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那須河川町小砂3112	☎ 0287-93-0711			
発行機関	水戸市教育委員会	所在地	〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1	☎ 029-224-1111(代)			
発行年月日	2020（令和2）年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)
堺遺跡 (第80地点)		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″	自 2020/01/27 至 2020/02/28	61.5
	茨城県水戸市堀田450番 2~10地先	08201	064	36° 24' 26"	140° 25' 38"		道路整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
堺遺跡 (第80地点)	集落跡	古墳	—	須恵器（壺）		奈良・平安時代の集落跡と古代末以降の側溝をもつ道路状遺構が確認された。	
		奈良・平安	竪穴建物跡、土坑、溝跡、ピット	須恵器（蓋・壺・高台壺・盤・瓶・壺・甕）、土師器（壺・甕）、瓦（男瓦・女瓦）、土製品（土鍬）、鉄製品（刀子・不明）			
		中・近世	溝跡、道路状遺構、ピット、性格不明遺構、土坑	陶器（小瓶・擂鉢）、土器（火鉢・土鍋）、石製品（砥石・硯）			

水戸市埋蔵文化財調査報告第122集

堀遺跡（第80地点）

一市道渡里31号線（その2）狭い道路整備工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷 令和2年3月25日

発行 令和2年3月25日

編集 株式会社日本窯業史研究所

発行 水戸市教育委員会

印刷 株式会社松井ビ・テ・オ・印刷

〒321-0904 栃木県宇都宮市陽東5-9-21

TEL 028-662-2511